

# 前方後円墳未築造地域における弥生から古墳時代前期の集落

—佐久盆地の集落分布の変遷を中心として—

小山 岳夫

## 要旨

本論の当初の目的は、長野県佐久盆地から上田盆地の弥生時代から古墳時代前期の遺跡分布状況を把握することにあった。米粒を爪で拾うような作業を重ねるうちに、弥生後期後半から古墳時代前期にかけて両地域には時期ごとの集落規模、複合状況などに明瞭な違いがあることに気付いた。

そこで分析対象を、長野盆地南部の一部にまで拡大して3地域を比較検討した結果、古墳時代前期において大規模な墳丘・堅穴式石室・豊富な副葬品を有する前方後円墳が築かれる長野盆地と木棺の主体部とする小規模な前方後方形墳丘を築くにとどまる佐久盆地では、弥生後期後半から古墳時代前期までの集落の盛衰に明瞭な違いがあること判明し、上田盆地には未発見の有力古墳が存在する可能性が高いことを指摘した。

## 1 はじめに

信州の弥生時代後期後半は、ベンガラをこすり付けて焼き上げた赤く彩った壺や高坏と、中部高地型という特有の櫛描波状文<sup>(1)</sup>を施す甕に象徴される所謂「箱清水式土器」土器が作られた時代（この時期を以下「箱清水期」という。）である。

箱清水式土器は、長野県北東部を縦貫する千曲川流域全般、すなわち長野盆地・上田盆地・佐久盆地にわたっておおむね同一の範疇で括られる土器型式と私は考えている。

なお、特有の櫛描波状文を施す甕は、形態を違えながらも峠路を越えて群馬県西部では「樽式土器」や埼玉県北東部では「岩鼻式土器」と呼ばれる兄弟型式として分布し、一部は東京都、神奈川県でも点的な分布を示している。

私は、最近調査の進行が著しい千曲川上流域に位置する佐久地域北部の西一本柳遺跡一帯の弥生後期集落の変遷を示した<sup>(2)</sup>。この際に今後の課題①-1として注目したのは、論文中で後期Ⅲ期新とした箱清水期前半における居住域の拡大現象であった。この時期は、佐久地域の弥生時代史の中で最も数多く集落が営まれるとともに、西近津遺跡では長辺18mにも及ぶ日本最大級の堅穴住居址を中心として1時期50軒規模が推定される集落が形成される<sup>(3)</sup>など、個々の集落についても成長著しい時期なのである。

本論は、視野をさらに拡大して佐久～上田地域全体の弥

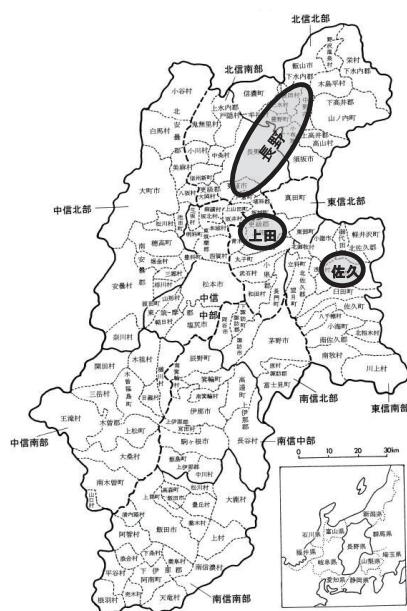


図1 長野・上田・佐久盆地の位置

生～古墳時代前期遺跡の動態を観察し、佐久地域における箱清水期前半の居住域の拡大現象の意味を考えるとともに、千曲川中流域上田盆地や下流域長野盆地の弥生後期後半から古墳前期の遺跡と比較することによって古墳時代において前方後円墳が築造されなかった佐久地域の特質を描出することを目的として執筆する。

## 2 佐久地域弥生～古墳時代前期の時間軸

佐久地域の弥生～古墳時代前期の遺跡動態を明らかにするため、表1に佐久地域の時間軸をまとめる。

弥生前期（氷Ⅱ式）については中沢道彦<sup>(4)</sup>、中期後葉（栗林式土器）については馬場伸一郎の編年<sup>(5)</sup>を援用する。弥生中期前葉・中葉は佐久地域では資料不足であったが、近年断片的ながら当該期の資料が出始めたのでその資料を充当する<sup>(6)</sup>。

後期は私が先行論文<sup>(7)</sup>で組み立てたものを図2に示し、古墳時代前期については富沢一明の土器編年を援用する<sup>(8)</sup>。弥生時代後期～古墳時代前期については以下に詳述し、長野盆地南部の編年との対比については表1の右側に記した。

表1 本論の時間軸 土器編年表（長野盆地と対比）

時期		佐久盆地		長野盆地		佐久地域の該当遺跡
縄文晩期	後葉	氷Ⅰ式	(中沢 2017)			氷 (1)、辰場 (2)
弥生前期	後葉	氷Ⅱ式				東五里田 (6)、下信濃石 (3)、宮浦 (8)、仲田 (4)、東大門先 (5)
弥生中期	前葉	-	宮浦 (8)、館 (14)、中原 (13)			
	中葉	-	平馬塚 (7)、宮浦 (8)、月夜平 (11)、町田			
		栗林Ⅰ式	深堀 (17)、北裏 (18)			
	後葉	栗林Ⅱ式古	根々井芝宮 (20)、和田上 (19)			
		栗林Ⅱ式新	西一本柳 (21)、北西の久保 (22)、五里田 (23) 等			
	栗林Ⅲ式	直路 (30-2) 1 住				
弥生後期	前葉	Ⅰ期	(小山 2014)	1 段階	(青木 1998)	西一本柳Ⅲ 7・41・116 住、西一本柳Ⅸ 4 号方形周溝墓、円正坊Ⅷ 10 住
		Ⅱ期		2 段階		西一本柳Ⅲ (21) 60・117 住、北西の久保 56・63・66・70 住、円正坊 (30) Ⅷ 23 住
	中葉	Ⅲ期古	3 段階	周防畑 (29-2) B13 住、1・2 号周溝墓、周防畑遺跡群 (29-1) 520 住		
		Ⅲ期新	4 段階	上直路 (30-4) 1 住、西近津遺跡群 (34)		
	後葉	Ⅳ期古	5 段階	北一本柳Ⅲ (33) 6・31・51 住、円正坊遺跡Ⅷ 36 住		
		Ⅳ期新	6 段階	西一本柳Ⅲ環濠 (M2 溝)、37・46 住、西一本柳ⅩⅤ 11 住		
古墳前期	前葉	Ⅰ期古	(富沢 2008)	北平 4 期	(青木 1996)	根乃井大塚、下小平 2・3 住、辻の前 9・13・14 住、下伯母塚 3・5 住、円正坊Ⅷ 1 号方形周溝墓、宿上屋敷 1・2 住、県 1 住
		Ⅰ期新		北平 5 期		中平・田中島 3 住、1・2 号周溝墓、近津 4002・5002・6007・7003・8005 住
	中葉	Ⅱ期		北平 6 期		瀧の峯 2 号墳、久保田 2・3 住、海戸田 A3・5・9 住、栗毛坂 B113 住、下原 1 住
	後葉	Ⅲ期				鎌田原 1・5・6・9 住、野火附 50・56 住、腰巻 2 住

### 中期後葉の末＝栗林式土器最終末

佐久市直路遺跡 1 住が該当する。

形態は栗林式土器の壺の特長である胴部下位に最大径をもつ細頸壺 (2・3) のほか、最大径が胴部中位に上がる傾向を示すもの (5～7) も現れる。鋸歯文を持つ壺 (8・9) は胴部がそろばん玉のように

張る特徴を持つ。

文様は栗林式土器の壺に当たり前にみられる縄文を地文として口縁部はヘラ描波状沈線、頸部には横位の沈線を多段に施す伝統的な要素を強く残す壺（1・2）、無文の壺（3）、縄文地文を失いヘラ描沈線のみ、懸垂文及び胴部中位の横位文様帯の簡略化が著しいもの（4・5）など栗林式土器壺の伝統要素が変容・解体した様相を示す壺、頸部に櫛描簾状文か直線文と波状文を多段に施すもの（6）、頸部文様帯下に施される鋸歯文が加わるもの（9）などこの段階に出現し次代に主体となる壺などが混在する。鋸歯状のヘラ描区画はないが、ヘラ描沈線を斜位に重ねて施文し鋸歯状の文様を意識した壺（8）もある。

甕は栗林式土器の甕の特長である強い横ナデによって屈曲する短い単口縁を有するもの（12・14）と、受口で口縁部が伸長し始めるもの（10・11・14～17）があり、頸部に櫛描簾状文、胴部に縦羽状文か波状文を施す甕が多く、斜格子文を施すもの（10）もある。

コの字重ね文を持つ台付甕は文様構成が変容して複合鋸歯文になるもの（18）がある。

高坏は塊状（21～23）と鐙状の坏部があり、脚部はいずれも短く未発達である。赤色塗彩は顕著である。

以上のように直路1住の資料は、栗林式土器の基本要素を残すもの、基本要素の解体の様子を示すもの、次代につながる要素も萌芽している様子を示す土器が混在しており、栗林式土器の中でも新しい様相を示している。

#### 後期Ⅰ期＝吉田期前半

従前該当資料がなかったが、西一本柳遺跡Ⅲ 7・41・116 住、Ⅸ 4 号方形周溝墓・Ⅹ 27 号住、円正坊遺跡Ⅷ 10 住などで良好な資料が出た。

壺は受口が多く、前代に比べ胴部最大径が上方に上がり最大径比率の縮小に伴う形態のスリム化が目立つ。栗林式の特徴である懸垂文と頸部縄文地文によるヘラ描沈線及び胴部施文は消失する。頸部に文様が収斂されて櫛描文優位となるが、櫛描文様帯の下部に付加する鋸歯文には鋭利な工具のヘラ描文（32・33）、所謂 T 字文には棒状工具のヘラ描文（27～29）を併用する。櫛描文のみで装飾する壺は、前代の中期末から登場した頸部に櫛描直線文か簾状文を巡らせ、その上か下に櫛描波状文を施し頸部を多段に装飾するもの（30・31）で中期の形態よりも腰高で細身となる。

前代に出現した鋸歯文を施す壺（32・33）は、胴部がそろばん玉のように張る形態を維持している。この段階では赤彩品は少ない。

甕は口縁部が直立か外傾して直線的に開き、胴部は球形に膨らむもの（34～36）と口縁～胴部が弓状に外反し端部が受口状となり、胴部上位に最大径を有する肩の張るもの（37～40）2系統が代表的で、口縁部はいずれも前代から始まった伸長化が顕著となる。文様は櫛描文のみで以下の時期も不変である。口縁端部に櫛描波状文が巡るものが多く、その下は文様を施さず、無文帯となるものが多い。頸部は櫛描簾状文の等間隔止めが多く、2連続止めもある。胴部は櫛描波状文が多段に施されるものが多いが、斜状文（34・35）もある。

高坏は鐙状の口縁部をもつもの（42）が増加し、前代よりも大きくなる。これに連動して脚部の大型化も始まる。

#### 後期Ⅱ期＝吉田期後半

北西の久保遺跡 56・63・66・70 住、西一本柳遺跡Ⅲ 60・117 住、円正坊遺跡Ⅷ 23 住出土土器を代表

とする。

壺は後期Ⅰ期の腰高の形態から胴部最大径が若干下降し、安定した形になる(49～52・55)。胴部がそろばん玉状に張る鋸歯文施文壺は最大径の下降がより顕著である(56～58)。受口の壺(49・51・58)はわずかに内湾する程度となり、単口縁の壺(50・52)も併存する。文様は口縁端部への施文がみられなくなり、頸部のみに施される。Ⅰ期以来のヘラ描スリットのT字文(51・52)、直線か簾状文と波状文を組み合わせる頸部を多段に周回するもの(53)などはⅠ期の文様を継承するが、新たにヘラ描か櫛描の横羽状文を施す壺(50・54)やヘラ描斜状文(49)やヘラ描斜格子文(55)が加わる。ヘラ描鋸歯文をもつ壺の上部文様帯は櫛描横羽状文帯の上部に櫛描波状文をもつもの(57)があり、Ⅰ期から継承する文様構成であるが、ヘラ描スリットのT字文の(56)や鋸歯文と同じ工具の鋭利なヘラ描沈線の横羽状文(58)や櫛描横羽状文(54)など新たな文様構成も現れる。この時期に出現した鋭利な工具で施文したヘラ描横羽状文(矢羽状文ともいう)は以後古墳時代前期まで、T字文と双壁を成す佐久地域の壺の代表文様となる。なお、赤彩は漸増するがまだ少ない。

甕の形態は前代の2系統を継承するが、いずれも胴部の張りが緩くなる。受口甕の受け部は形骸化する。口縁部は無文でなくなり、波状文充填が定着し、口縁・胴部は櫛描波状文か横羽状文、頸部は櫛描2連止め簾状文が多い。櫛描横羽状文はこの段階にもなく、前代同様胴部の櫛描波状文帯下に斜状文を施すもの(59・60・62)がみられる。ここまで、「コ」の字重ね文の台付甕(72)が残存する。

高坏は椀状の坏部(74)と齔状の口縁部(75)を持つ坏部を持つものがあり、Ⅰ期よりもさらに大きくなるが、脚部は未だ小ぶりである。

#### 後期Ⅲ期古＝箱清水期前半

周防畑B遺跡1・2号周溝墓、13住、県埋蔵文化財センターが中部横断道建設に際して調査した周防畑遺跡群520住などを代表とする。

Ⅱ期の胴部中位が張る壺はⅢ期古には最大径がさらに下降するもの(81・82)がみられる。新たに胴部下半に稜をもつ壺(78・80・1・83)が出現し、壺は全体的に赤彩が顕著となる。文様は鋭利なヘラ描横羽状文(79～81)・ヘラ描斜状文(78)・櫛描横羽状文(80・2)・ヘラ描スリットのT字文(84・2・85)・斜格子文(82)が前代から継承され、新たに1単位の櫛描スリットのT字文(84・1)が現れる。鋸歯文はこの段階でも少数ながら残存する(86)。

甕の形態・文様はⅠ期以来の2系統を継承する最終段階であるが、受口甕の受け部はⅡ期よりもさらに形骸化する(89～93)。櫛描波状文とともに横羽状文施文が本格化する。

高坏は椀状の坏部(96)と齔状の口縁部を持つ坏部(97～99)を持つものがあり、脚部の大型化が達成される。周防畑B遺跡の坏下部に稜をもつ高坏(98・99)はこの時期の佐久地域では稀有な例である。

#### 後期Ⅲ期新＝箱清水期前半

上直路遺跡Y1住を代表とし、今回は未報告のため用いないが、中部横断道建設関連発掘調査の西近津遺跡に充実した資料がある。

胴部下半に稜をもつ壺(102・103)が定着し、稜を持たない壺(104・106)を上回る。文様は壺においては1単位の櫛描スリットのT字文を施すもの(102～104)と鋭利な工具によるヘラ描横羽状文を施すもの(105・106)がある。106には鋸歯文が付加されている。鋸歯文はⅢ期新までで消滅する。



甕はⅠ期から続いたⅡ系統の形態差がなくなり口縁から胴部が弓状に反る形態に統一される（107～115）。頸部に櫛描簾状文、口縁・胴部には櫛描横羽状文（107～112）か櫛描波状文（113～115）が施される。甕に施される横羽状文はこの時期から多用され、千曲川右岸地域では波状文よりも横羽状文の方が優勢であるが、左岸地域の後沢遺跡などでは横羽状文は見られない。

高坏は椀状の坏部（116）と鐙状の口縁部の坏部（117）を持つものがあり、Ⅲ期古に確立した脚部の大型化も維持する。坏下部に稜をもつ高坏は少ない。

弥生後期Ⅱ期に確立する壺頸部のヘラ描横羽状文、Ⅲ期新に多用される甕の櫛描横羽状文は、このうち古墳前期Ⅱ期まで継承される。これは長野盆地、上田盆地にはない佐久地域固有の現象である。

#### 後期Ⅳ期古＝箱清水期後半

北一本柳遺跡Ⅲ 6・31・51 住、円正坊遺跡Ⅷ 36 住出土土器などを代表とする。

壺は胴部幅の拡張に伴い、口縁から胴部への反りが強くなり全体的に肥った形態となる（120～126）。口縁部は単口縁が多いが、受口も増え始める（124・125）。壺の頸部文様は、櫛描簾状文下の櫛描波状文を２本一組の櫛描スリットを施すもの（121）、櫛描簾状文下に櫛描波状文を周回させるもの（120・122）、櫛描簾状文下に櫛描直線文を周回させるもの（125）、櫛描直線文のみを周回させるもの（124・126）など櫛描文のほかに、ヘラ描斜格子文（123-1）や無文のもの（123-2）など多くの種類の文様構成となり、前代のⅢ期新の壺の主文様であった１本単位の櫛描スリットで区切るＴ字文単体で飾る壺はなくなる。

甕はⅢ期新で形態の統一が図られた口縁部が弓状に外反する単口縁の甕がほとんどである。壺に比べ胴部幅の拡張は少なくⅢ期新からの変化は少ないが、口縁部から胴部への外反度が強まるもの（129・130）、胴部最大径が中位から下位に下がるもの（133・134）も見られるようになる。

高坏は椀状の坏部と鐙状の口縁部の坏部（136・137）を持つものがあり、坏下部に稜をもつ高坏（137）もこの時期から目立つようになる。脚部がⅢ期新よりも大きく開くようになり、その結果、低脚化する（136）。

#### 後期Ⅳ期新＝箱清水期後半

従前<sup>⑨</sup>はⅤ期として下小平遺跡出土品を充てていたが、小型高坏などが共伴する段階と判断するため、今回古墳Ⅰ期に繰り下げ、新たに西一本柳遺跡Ⅲ環濠（M2 溝）・Ⅲ 37・46 住・X V 11 住の資料を挟み込んでⅣ期新とした。

壺・甕ともにⅣ期古よりも口縁・胴部の横幅が拡張し球胴化が進む。

壺は受口状の口縁部（142～144）も目立つようになり、受口端面外面には櫛描波状文が施されるもの（142）と無文のもの（143～144）がある。頸部文様は２本一組の櫛描スリットＴ字文を施すもの（140・141・143・144）、櫛描簾状文が単独で施されるもの（145）、櫛描直線文を周回させるもの（142）や櫛描直線文の下に簾状文を周回させるもの（139）がみられる。ヘラ描横羽状文については、Ⅳ期古・新では未確認であるが、古墳前期Ⅰ期新の中平・田中島遺跡や松の木遺跡において壺の頸部文様での使用が確認されているため、Ⅳ期にも存在していた可能性が高い。

甕は口縁部から胴部が弓状に外反する形態は維持しているが、Ⅳ期新に比べて胴部中位の張りが顕著になり、球胴化への傾斜が認められる（147～151・153）。文様は頸部に櫛描簾状文を施すもの（147～151・

153)とともに施さないもの(152)があり、本来壺の文様である2本一組みの櫛描T字文を施すもの(154)も見られる。口縁部と胴部の文様は、櫛描波状文を施すもの(149~154)と横羽状文を施すもの(148)があるが、両者が混在して施文されるもの(147)もある。在地の甕の系統からは生起しない形態・刷毛調整を有する甕(155)もある。

高坏は椀状の坏部(156)と鐙状の口縁部の坏部(157~160)を持つものがあり、坏下部に稜をもつもの(158~160)が多い。Ⅳ期古よりも低脚化して、器種としての小型化が顕著となる。

### 古墳前期Ⅰ期古

佐久市根乃井大塚墳丘墓、下小平遺跡2・3住、辻の前遺跡9・13・14住、円正坊遺跡Ⅷ1号方形墓、下伯母塚遺跡3・5住、宿上屋敷1・2住、北陸新幹線建設に伴う長野県埋蔵文化財センター調査の軽井沢町県遺跡1住などを代表とする。

弥生土器色が濃く残る段階で在来の弥生(箱清水)系土器(以下「弥生系土器」という)については、弥生後期Ⅳ期新との形態差、文様差が少ない。

壺は、ほとんどが在来の弥生後期土器の要素を継承する。単口縁のもの(163・165・167)と受口の口縁部(168~173)があり、前代に比べて受口のもが目立つ。胴部形態は前代と大きな変化はない。赤色塗彩品とともに、無彩の壺が増加する。無彩壺で口縁部から胴部への屈曲が極端に強く、全体的には寸詰まり形態のもの(163)や胴部下半から底部の高さが低いもの(164)はこの時期から古墳前期Ⅱ期にまでみられる。

弥生系土器の甕は、弓状に外反する単口縁のものがほとんどであるが、貼り付け口縁の甕(182)も存在する。前代同様に胴部幅が拡張し、肥った形態を示すもの(175~177・182~185)が多くなり、下膨らみ傾向のもの(182~185)もある。

軽井沢町県遺跡から出土している土器(178・179-1・179-2・186)は、佐久地域では稀有な存在である。頸部が明瞭に屈折して口縁部が外反する甕(178)は、佐久地域には見られず、長野盆地に多く見られる。また、北陸系土器(179-1・2)も佐久地域では出土量が少ない。壺か甕か判断の難しい土器(186)は群馬県の樽式土器の影響が考えられる。

高坏は在来の低脚化した高坏(181)に加え、東海系の器台(187・188)の出現を画期とする。これに伴って欠山系の高坏(190)やS字甕A・B類(180-1・2)、ひさご壺(174)などが少量加わる。

### 古墳前期Ⅰ期新

中平・田中島遺跡3住・1・2号周溝墓、近津遺跡4002住・5002住・6007住・7003住・8005住、小諸市久保田遺跡2・3住、佐久市海戸田A遺跡3・9住出土資料などを代表とする。

弥生系土器の壺・甕は、前代よりもさらには頸部の屈曲がきつくなり球胴化が進行する。

壺は単口縁と受口口縁があり、口縁部から胴部への屈曲がいつそう強くなるもの(197・200-1・200-2・231)、胴部から頸部への屈折が明瞭なもの(199)などが現れ、胴部の張りもさらに進んで球胴化するものがある(197・202・203・233)など旧態からの変容が著しい。Ⅰ期古同様無彩のものも多い。文様は頸部の櫛描文主体で、櫛描スリットのT字文(200-2・231)、櫛描簾状文(202・203)、簾状文と直線文の組み合わせ(199)、簾状文と波状文、直線文のみのもの(233)、無文のもの(197・200-1)などがあるが、ヘラ描横羽状文(198)も残存する。無文の197は刷毛調整痕が明瞭に残り、箱清水式土器

の慣れの果て的な様相を示す。

甕は単口縁が主流で貼り付け口縁（211）もある。胴部の下膨らみが進行するもの（210）、肩部が張るもの（209・235）、球胴状を呈するもの（234・236）などがあり、全体的にいっそうの球胴化が進行する。甕の文様は、櫛描横羽状文と波状文があり、横羽状文が多い。頸部に2本一組みのT字文を施すもの（207-1）もある。佐久地域ではこの段階でハケ調整の甕は少なく、在地の弥生系の文様が色濃く残るが、波状文よりも横羽状文を多用する傾向がみられるのは、ハケ調整を強く意識しているようにも思える。

高坏は弥生系の小型化した坏下部に稜をもつ高坏など（220・226・227）が残存している。

外来系土器は、前代同様欠山系の高坏（225）やS字甕B類（212・238）、ひさご壺（201-2・204・205）、有段口縁を持つ壺（201-1・232）などが在地の壺・甕ともに出土する。器台は東海系（246）もあるが、椀状の受け部を持つ畿内系器台（228・239・240・242）が見られるようになる。

### 古墳前期Ⅱ期

佐久市海戸田A遺跡5住、同市瀧の峯2号墳、同市栗毛坂B遺跡113住、同市下原遺跡1住出土資料などを代表とする。

弥生系土器の壺は、前代の口縁部から胴部への屈曲がいっそう強くなるもの（249）が残存する。この壺の頸部文様には櫛描簾状文が施される。

弥生系土器の甕は頸部が「く」の字状に屈曲し完全に球胴化するもの（250）が現れる。この壺の文様は口縁部に櫛描波状文、胴部に櫛描横羽状文、頸部に櫛描簾状文を施す。

弥生系の小型化した坏下部に稜をもつ高坏はこの段階には残らない。

無文の球胴壺（259・260）が増える。

刷毛調整の甕（247・263・264以下「刷毛甕」という）が増加する段階でヘラ削りの後、ヘラミガキする甕（262）も共存する。これらの甕は口縁部が短く「く」字状に開き、胴部は球形状を呈する点で共通する。

外来系土器については瀧の峯2号墳、海戸田A遺跡で椀状の坏部をもつ小型高坏（254）と有段の受け部を持つ畿内系器台（248・251～253）がある。これらの遺跡の出土土器には小型丸底壺・鉢の存在を確認できない。

一方、栗毛坂B遺跡、下原遺跡では有段の畿内系器台（266～268・271）とともに小型丸底土器（269・270）が確認できる。

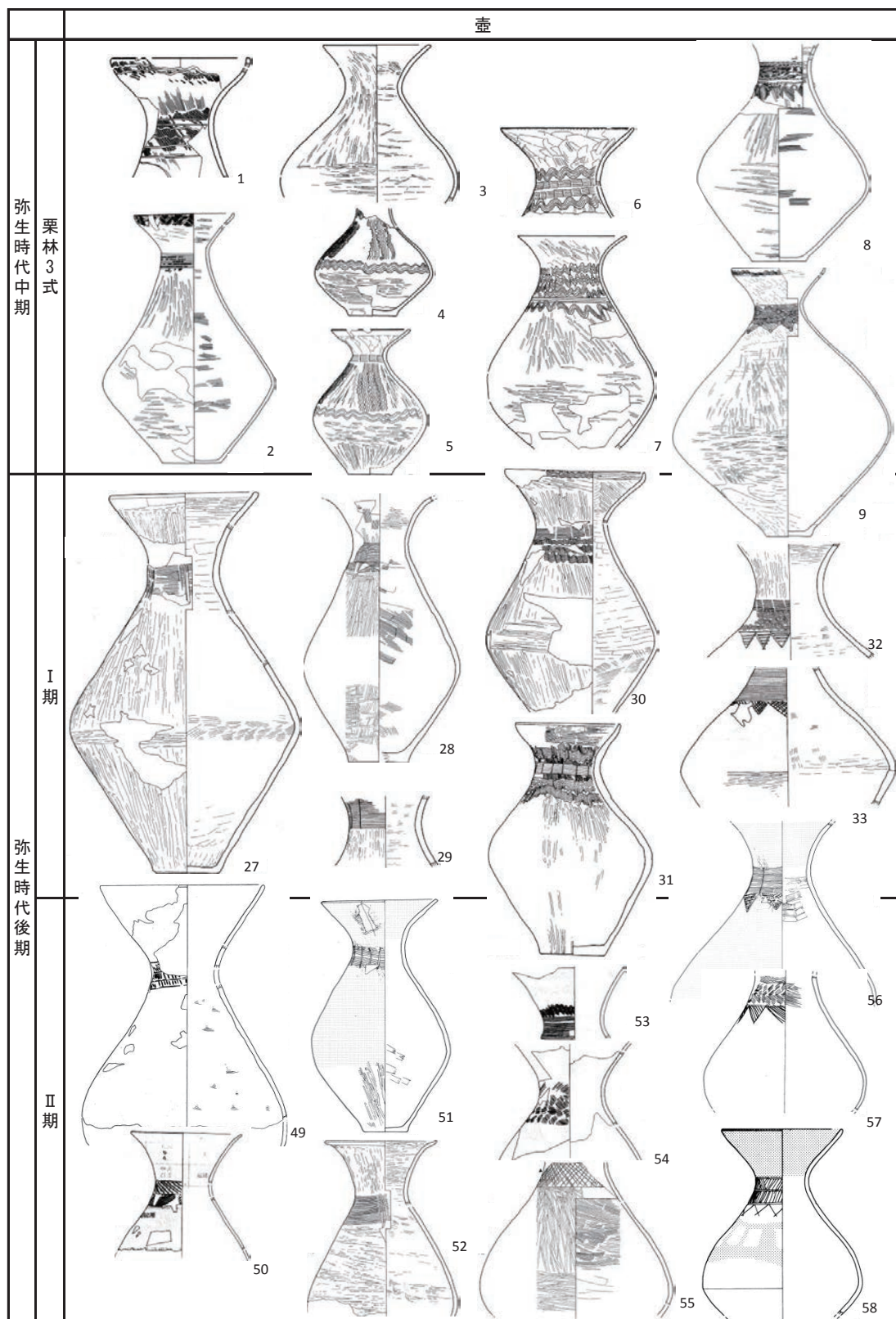
宇賀神誠二は前者の遺跡と同時期と考えられる奈良県平城下層遺跡出土資料などには小型高坏・器台と共に小型丸底壺・鉢が加わっていることから、長野県では小型丸底壺・鉢はやや遅れて登場することを想定している。

瀧の峯墳丘墓、海戸田A遺跡5住出土資料は弥生系土器の残影が強く、栗毛坂B遺跡、下原遺跡は弥生色の払しょくがより顕著である点から見て、前者が古く後者が新しい様相を示すものと思われる。

### 古墳前期Ⅲ期

小諸市鎌田原遺跡1・5・6・9住、野火附遺跡50・56住、長野県埋蔵文化財センター調査の佐久市腰巻遺跡2住などの出土土器を代表とする。

図2 佐久地域弥生時代後期～古墳時代前期土器編年表

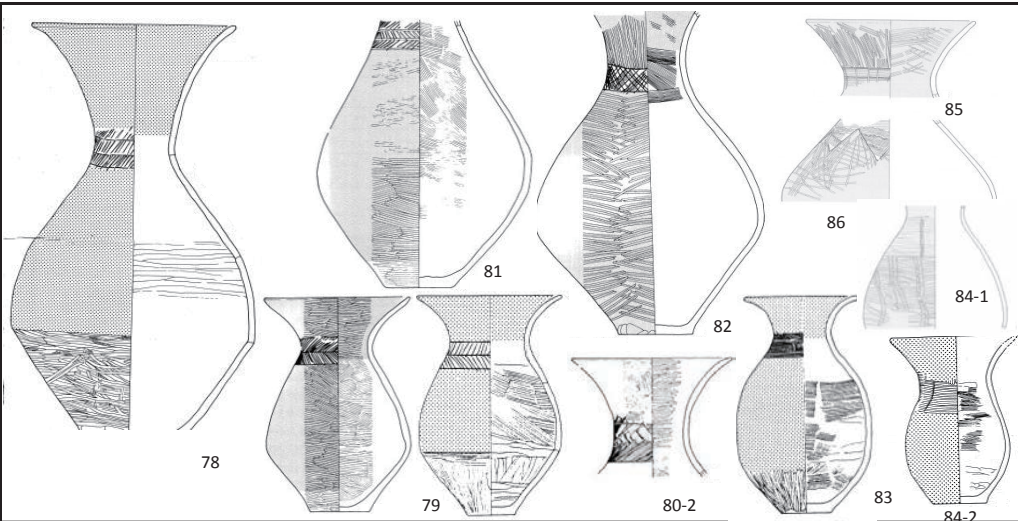






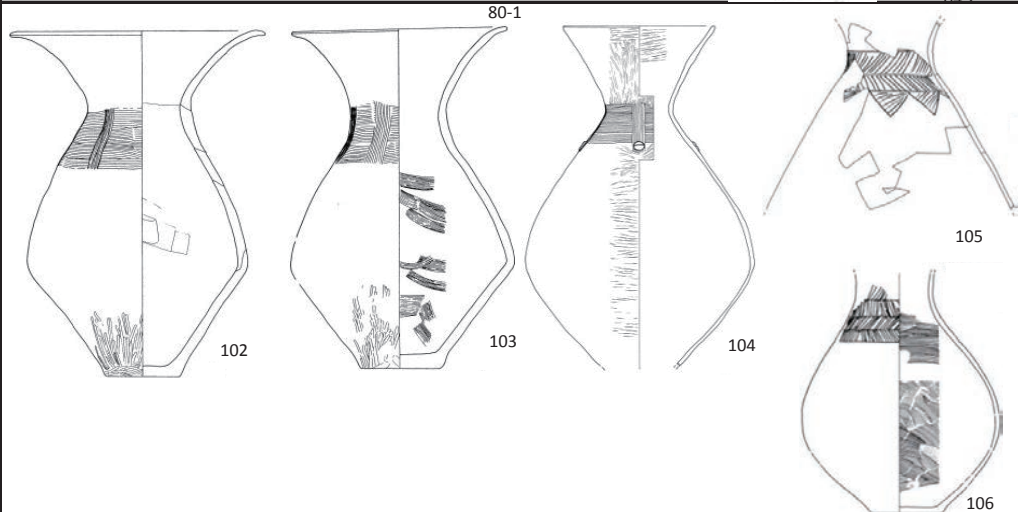


Ⅲ期古

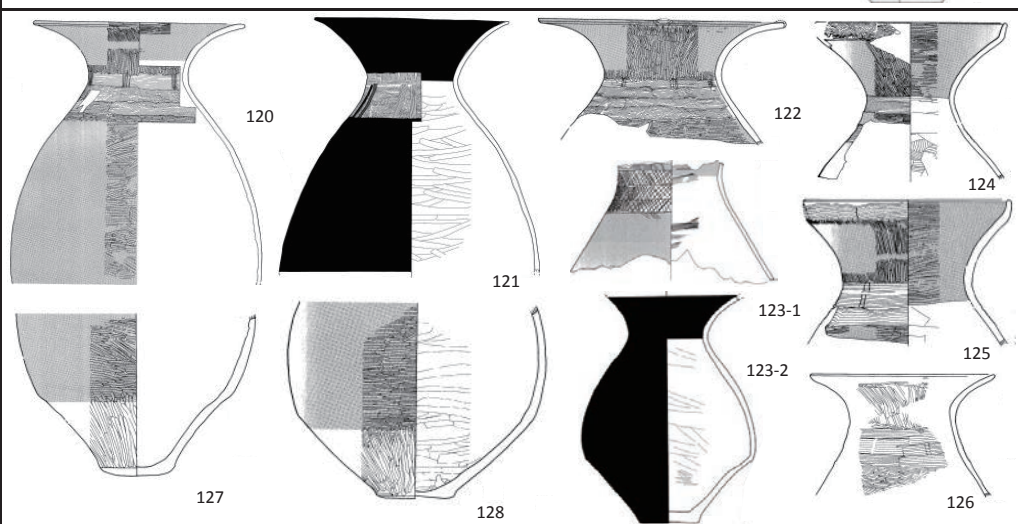


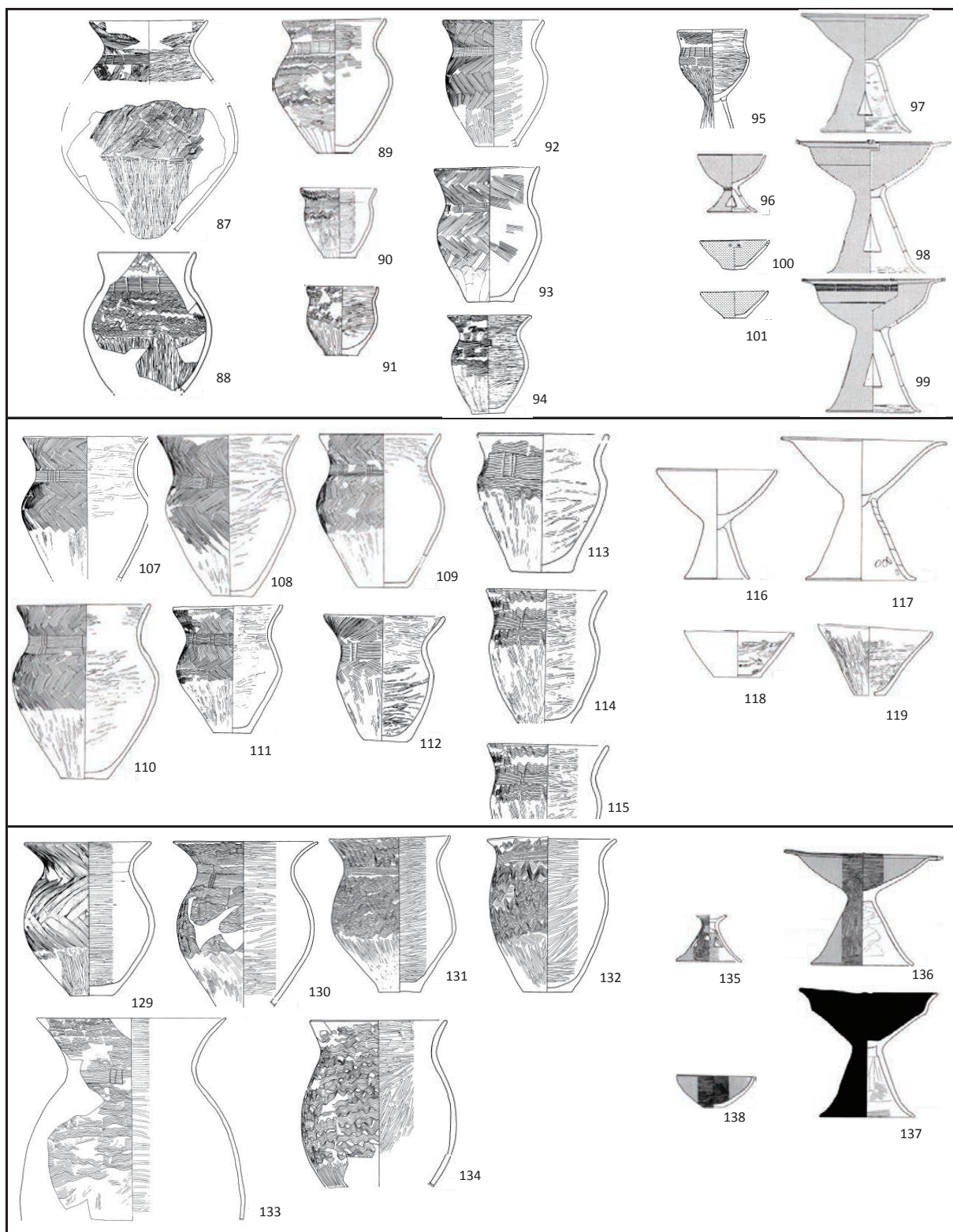
弥生時代後期

Ⅲ期新



Ⅳ期古

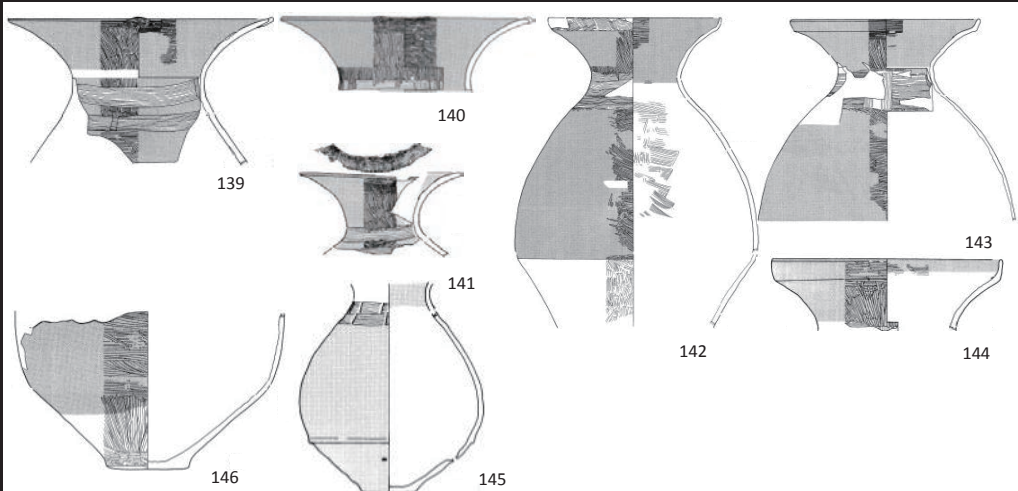




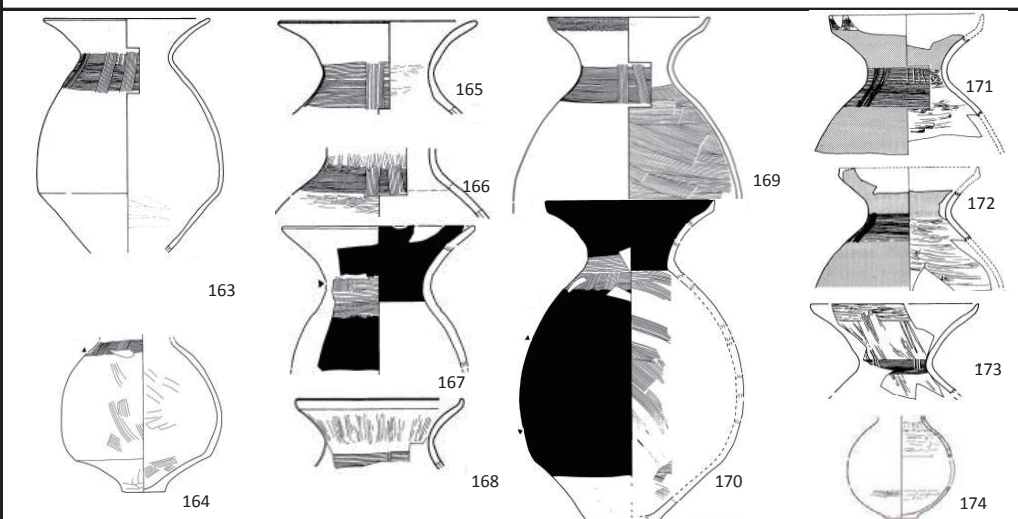


弥生時代後期

IV期新

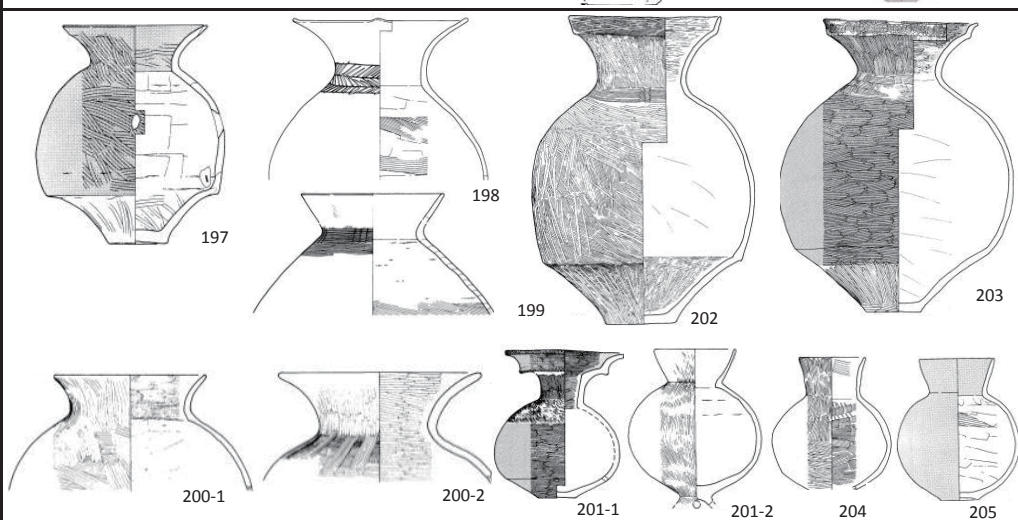


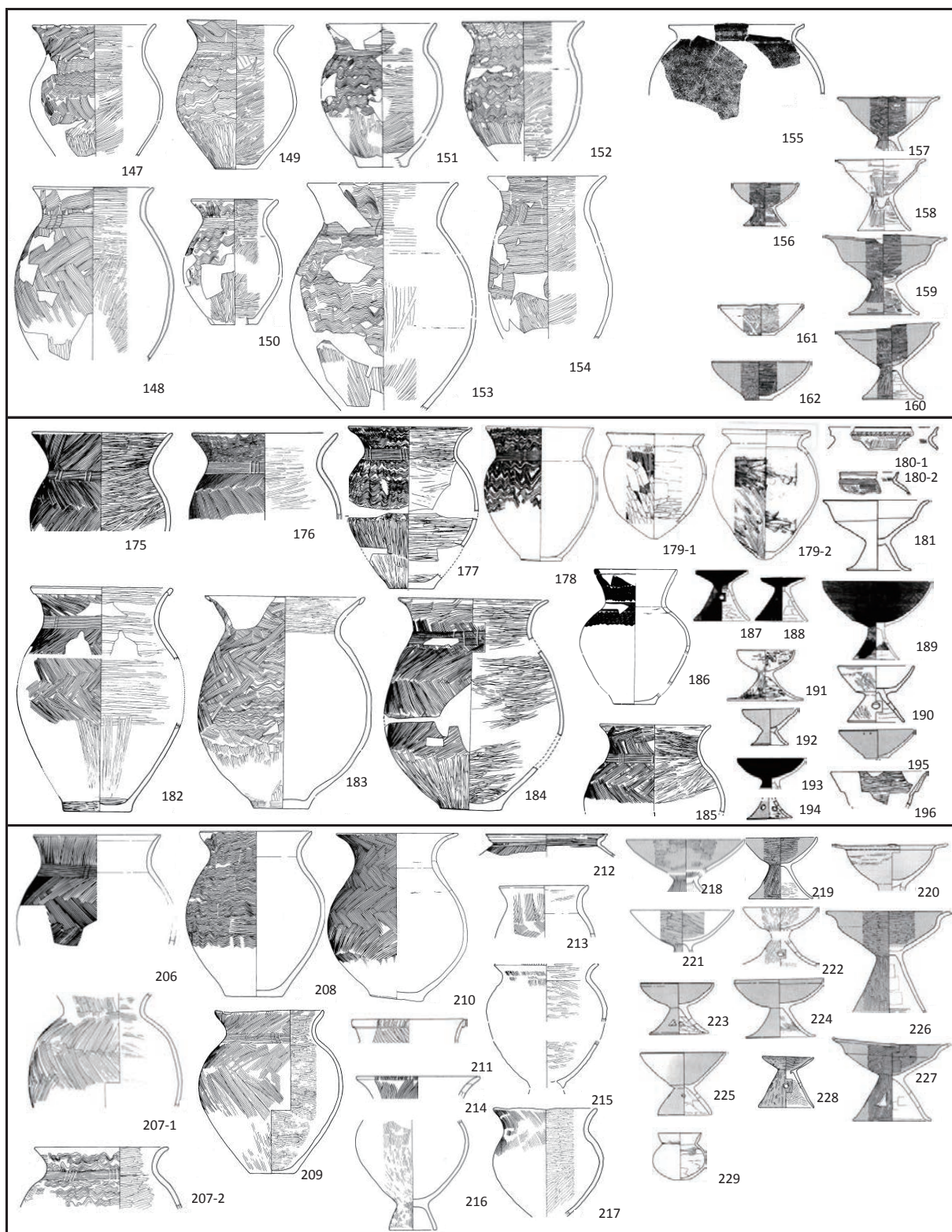
I期古



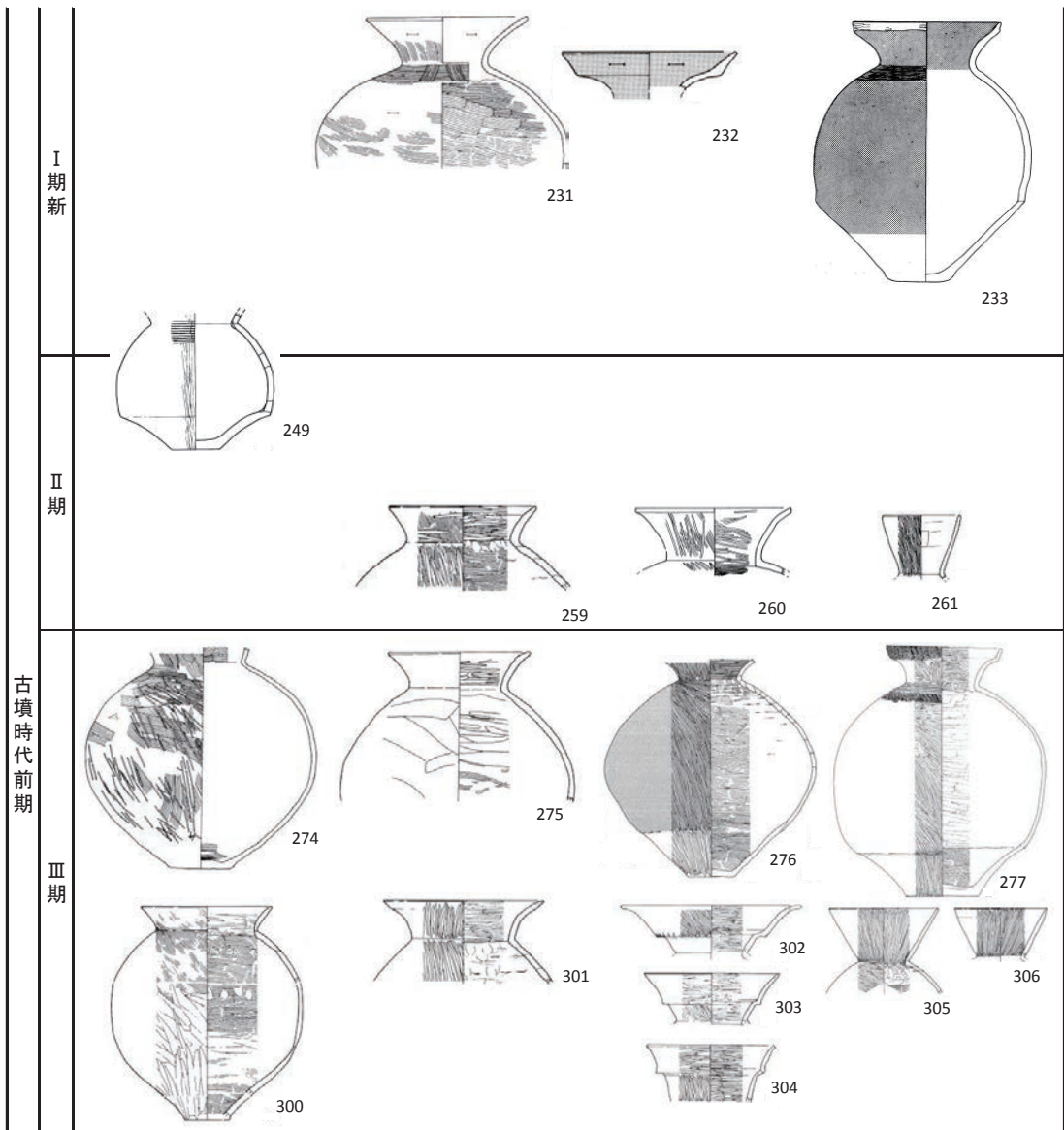
古墳時代前期

I期新









栗林3式：1～26直路遺跡1住

弥生後期Ⅰ期：27・42 西一本柳Ⅲ 7住、28・46・47 円正坊遺跡Ⅷ 10住、29・30・32～34・37～40・48 西一本柳Ⅲ 41住、  
 弥生後期Ⅱ期：49・52～54・61 西一本柳Ⅲ 60住、50・64～66 西一本柳Ⅲ 117住、55・59・60・67・72・74～77 円正坊Ⅷ 23住、  
 弥生後期Ⅲ期古：78・88・91 周防畑B13住、80・183・87・94・96～101 周防畑B2号周溝墓、84・2・95 周防畑B1号周溝墓、  
 後期Ⅲ期新：102～119 上直路遺跡1住

後期Ⅳ期古：120・122・126～128・130・134・136 北一本柳Ⅲ 6住、123・1 北一本柳Ⅲ 31住、124・125・129・133・

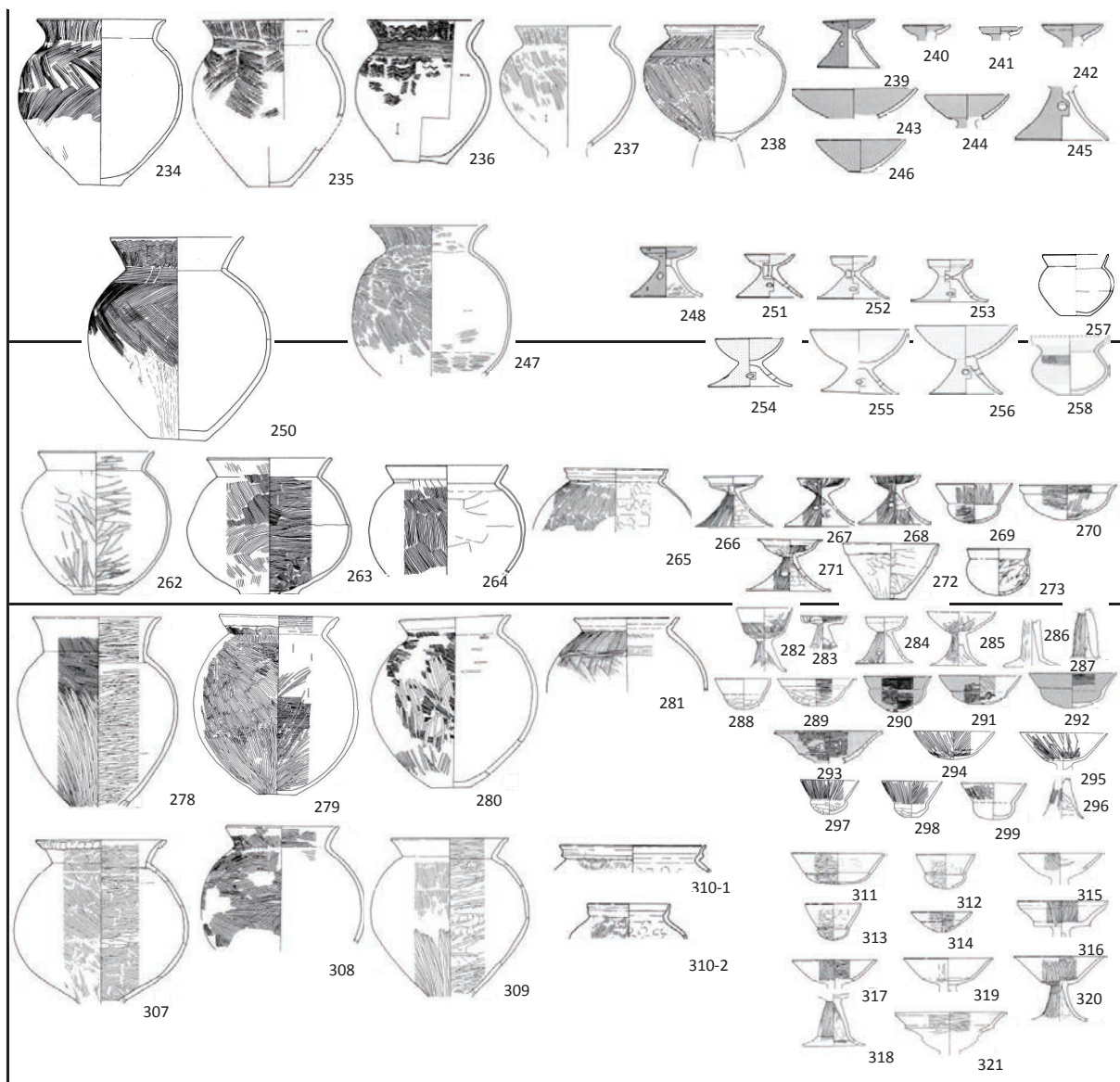
後期Ⅳ期新：140・146・148・149 西一本柳Ⅲ 37住、141・144・157・162 西一本柳Ⅲ 46住、139・142・143・147・150  
 古墳前期Ⅰ期古：163・165・166・169・176 下伯母塚3住、168・181 下伯母塚5住、164・167・170・193 円正坊Ⅷ 1号周溝墓、  
 190 辻の前9住、174・180・1 辻の前13住、180・2 辻の前14住、191 宿上屋敷1住、182・183 宿上屋敷2住

古墳前期Ⅰ期新：198・199・206・208・210～212・214・220 中平・田中島3住、205・213・223～225・229 中平・田  
 218 近津6007住、200・1・201・1・215・219・221・228 近津7003住、201・2・204・222・227 近津8005住、231・236・

古墳前期Ⅱ期：247・248 海戸田A5住、249～258 瀧の峯2号墳、259・265・271～273 栗毛坂B113住、260・261・262

古墳前期Ⅲ期：289～291 鎌田原3住、277・282・288 鎌田原5住、276・284・286 鎌田原6住、278・283・287・304 鎌  
 309・310・2・321 腰巻3住、313 腰巻6住、305 腰巻8住、307・310・1・317～320 腰巻遺構外





35・36・41・43 西一本柳Ⅲ 116 住、31 西一本柳Ⅸ 4 号方形周溝墓  
 58・62 北西の久保 56 住、51・56・69～71 北西の久保 66 住、68・73 北西の久保 70 住、北西の久保 57・63 住  
 85・86 周防畑遺跡群 509 住、79・80-2・90・93 周防畑遺跡群 520 住、84-1 周防畑遺跡群 522 住、82・89・93 周防畑遺跡群 523 住

138 北一本柳Ⅲ 51 住、121,123-2131・132・137 円正坊Ⅷ 36 住  
 ～156・158～161 西一本柳Ⅲ 12 号溝（環濠）、145 西一本柳ⅩⅤ 1 1 住  
 175・192・194・195 住下小平 2 住、171・172・175・184・185・196 下小平 3 住、178・179-1・2・186 県 1 住、187～189 根乃井大塚、

中島 1 号周溝墓、197 中平・田中島 2 号周溝墓、200-2・203・209・217・226 近津 4002 住、202・207-1・216 近津 5002 住、207-2・  
 237・238 海戸田 A3 住、232・235・240～246 海戸田 A9 住、233・234・239 久保田 2・3 住  
 ～264・266～270 下原 1 住

田原 9 住、274・275・280・293・299・308 野火附 50 住、279・294～298 野火附 56 住、300～303・306・311～313・316 腰巻 2 住、

弥生系土器の壺は受口口縁で完全に球胴化して、胴部下位に箱清水式土器の特徴である稜を有するもの(277)がある。この壺は口縁部に櫛描波状文、頸部に櫛描簾状文と波状文を施し、文様の面でも弥生色を色濃く残している。口縁部～頸部は欠損しているが、胴部下位に稜を有する壺は多く、弥生系土器の影響がこの段階まで色濃く残っている。

弥生系以外の壺も図示したように一様に球胴壺である。

甕も多くは球胴甕であるが、278はⅠ期古に位置付けた軽井沢町県遺跡の178の甕のプロポーシオンを継承しているように思える。文様については弥生系土器が払しょくされて、刷毛甕(278～280・307～309)が主体になる。ヘケズリ調整する甕もある。胴部下位を入念にヘラミガキ調整するもの(278・279・307・309)もあり、土器調整技法についてはいまだ弥生時代の遺制が色濃く継承されている。

Ⅲ期は小型精製土器群の崩壊期で、器台の消失傾向及び屈折脚の脚部の高坏(286・287・318)の出現に象徴される。有段口縁の壺(302～304)もこの時期になって顕著になる。S字甕(281・310-1・310-2)も少量ながら出土する。この時期になると弥生系土器の色合いは全体的に薄くなるものの、まだ伝統的な形態・文様・調整技法は残っている。

以上古墳前期の土器については、富沢一明の編年を参考にしながらも、弥生系土器に中心に変遷を追って見たため、富沢の意図を十分にくみ取っていない点もある。

### 3 箱清水期の暦年代

参考までにAMS法による年代測定値を得ている弥生時代前期末(氷Ⅱ式)の年代を示しておく。平馬塚遺跡は481calBC-400calBC、東大門先遺跡は537calAD-412calADで、同じく氷Ⅱ式の下信濃石遺跡、東五里田遺跡は平馬塚遺跡と近い数字を示す<sup>(10)</sup>。

弥生時代中期は、栗林2式新のデータがある。西一本柳遺跡XⅣ M11 溝出土の小型壺から出土したイネ胚乳は163calBC～56calBCという数字を得ている<sup>(11)</sup>。

弥生時代後期は、Ⅳ期古のデータがある。北一本柳遺跡Ⅲ 56・61 住炭化物の暦年較正結果は、56 住イネ胚乳が137calAD～223calAD、61 住マメ類種子が130calAD～214calAD・クリの炭化材が83calAD～209calAD<sup>(12)</sup>であった。

### 4 佐久地域の弥生～古墳時代前期遺跡の分布状況

弥生時代後期遺跡の分布状況の特長を鮮明に描出するために、縄文時代晩期末から古墳時代前期前半までの遺跡分布状況を千曲川右岸の湯川・濁川・湧玉川・繰矢川周辺を佐久盆地北部、滑津川周辺を佐久盆地南東部、千曲川左岸の片貝川周辺を佐久盆地南西部と区分けして概観する。

(1) 縄文時代晩期末(氷Ⅰ式)・弥生時代前期(氷Ⅱ式)・弥生時代中期前葉～中葉(境窪段階併行)【図3】  
縄文時代晩期後葉(氷Ⅰ式)

小諸市氷遺跡(1)や上田市大日ノ木遺跡(201)に象徴されるように縄文時代晩期末(氷Ⅰ式)の遺跡は佐久盆地平坦部からは離れた山間部にある半面で、御代田町辰場遺跡(2)のように繰矢川沿いの段丘面へ進出する遺跡も見られるようになる。

### 弥生時代前期後葉（氷Ⅱ式）

続く弥生時代前期（氷Ⅱ式）になると、佐久盆地平坦部への進出が顕著となり、佐久盆地南西部千曲川左岸沖積地の東五里田（6）、宮浦遺跡（8）、北部の湯川第1段丘上の下信濃石（3）、仲田遺跡（4）などかつて縄文時代には遺跡が立地しなかった低地への進出が明瞭になる。これは上田盆地も同様で、千曲川左岸沖積地の塩田平上田原遺跡（203）で氷Ⅱ式土器が検出されている。佐久・上田地域で最初に水田農耕を目指した人々は、取水しやすい半面で洪水のリスクが高い場所を居住域・生産域に選択したのである。

これ以外に、佐久市東大門先遺跡（5）のように弥生中期中葉以降には遺跡立地の主舞台となる湯川第2段丘面に進出する例や、標高1300mを超える南牧村矢出川南遺跡なども存在する。

### 弥生時代中期前葉（ほうろく屋敷段階併行）～中葉（境窪段階併行）

続く中期前葉～中葉では鯨面表現をもつ容器型土偶で著名な佐久穂町館遺跡（14）、壺棺再埋葬の中原（13）、月夜平遺跡（11）など千曲川上流域の南佐久郡の山間部に存する既出資料が知られていたが、最近、平馬塚（7）、宮浦（8）、反田遺跡（12）など佐久盆地南東部の千曲川沿いの沖積地や段丘面、南西部の滑津川沿いの丘陵部にあたる後家山遺跡（9）の発掘調査でも遺構・遺物が発掘され、佐久盆地の南部からさらに南側の山間部に当該期の遺構・遺物が偏在することが明らかになってきた。特に平馬塚遺跡では、佐久地域では初めて堅穴住居址が検出された。その意味は大きい。今回出土地点が絞り込めなかったため未掲載とした八幡一郎が『南佐久郡の考古学的調査』で報告した櫻井村町田遺跡出土土器もこの時期に当たり、やはり千曲川左岸の沖積地から出土したものと考えられる。

以上のように弥生前期末段階には佐久盆地の川沿いの低地に少数点在した遺跡が、中期前葉～中葉になると同じ低地でも佐久盆地南部に片寄って分布し、さらに南の八ヶ岳北東麓に当たる南佐久郡の山間部にも遺跡が点在しており、現状では、中期前葉～中葉の遺跡は佐久地域南部に偏在する傾向が指摘できる。

### （2）弥生時代中期中葉（栗林1式）～中期後葉（栗林2式古・新～栗林3式）【図4】

#### 弥生時代中期中葉（栗林1式）

弥生中期中葉でも新しい段階の栗林1式以降になると佐久盆地北部・南東部では湯川や滑津川の第2段丘上の台地、南西部では八ヶ岳山塊の末端丘陵部への居住域の進出が明瞭になる。

栗林1式の集落址の発見例は少なく、佐久盆地南東部の滑津川沿いの深堀遺跡（17）や、南西部の北裏遺跡（18）に限られる。集落規模は小さい。

#### 弥生時代中期後葉（栗林2式古）

栗林2式古になると集落の規模が大きくなる。根々井芝宮遺跡（20）では当該期の堅穴住居址が43軒検出された。集落を全掘したわけではないので、さらに多くの堅穴住居が存在している。同時期の集落としては坪井正五郎の碑で著名な和田上遺跡（19）がある。

#### 弥生時代中期後葉（栗林2式新）

栗林2式新段階になると、佐久盆地北部千曲川右岸湯川沿いの西一本柳遺跡一帯に一大集住集落遺跡

(西一本柳 (21)・北西の久保 (22)・五里田 (23)) が営まれる。調査面積は遺跡の半分程度であるが3遺跡合計の栗林期の竪穴住居址数は300軒に及ぶ。この一帯の西方にもこれに付随するかのような中小規模の集落遺跡 (森平 (24)・寄塚 (25)・白山 (26)・川原端 (27)・西一里塚 (28)) も存在する。この時期、佐久盆地北部では、湯川沿いの開拓を集中的に行っていた状況が垣間見える。また、湯川沿いのみでなく、西一本柳遺跡一帯の北方の田切り地形末端部の開発を模索し始めていたことが、周防畑 (29)・清水田遺跡 (30-1) など総数5軒にも満たないごく小規模な集落遺跡の存在からうかがい知ることができる。

一方、栗林2式新段階の佐久盆地南西部や南東部では、北裏・西裏遺跡群に集住の痕跡が見られるほかは、ごく小規模な集落 (後沢 (32)・後家山 (9)・樋村 (31)) が存在するに過ぎず、これらが新開地を求めて居住域を構えたものの成長することもなく、いったんは消滅への道をたどったようである。

### 弥生時代中期後葉 (栗林3式期)

栗林3式の集落遺跡は、今のところ西裏 (18)・円正坊 (30-3)・直路遺跡 (30-2) などに見られるに過ぎず、隆盛を誇ったかに見える前代に比すれば集落数・規模ともに一挙にしぼんだ状況となる。栗林期の集落の急激な縮小については、鉄器の普及に伴い栗林2式新段階における大規模集落の経営を支えた榎田産磨製石斧の生産体制崩壊に連動する拡散現象とする意見とともに、弥生時代中期末における気候変動も重要な要因の一つとして考えなければならない。

### (3) 弥生時代後期前葉 (Ⅰ期～Ⅱ期) 【図5】

#### 弥生時代後期前葉 (Ⅰ期)

後期前葉はいくつかの複合的要因により、壊滅状態に陥った弥生中期後葉から復活の地歩を固める時代である。後期Ⅰ期の集落遺跡の発見例は、今のところ西一本柳 (21)・円正坊 (30-3)、西一里塚遺跡 (28) などで佐久盆地北部に限られる。西一本柳遺跡では22軒の竪穴住居址が見つかり、周辺の調査状況から見てこれよりも一回り大きな規模の集落であったことが推定できる。円正坊遺跡、西一里塚遺跡は規模を推し量れる状況にないが、あまり大きな集落ではないようだ。

#### 弥生時代後期前葉 (Ⅱ期)

後期Ⅱ期になると佐久盆地各所に居住域が営まれるようになる。

北部の西一本柳遺跡ではⅠ期に引き続き、Ⅱ期では規模を減じた集落遺跡 (発掘数は6軒) が営まれる。隣の北西の久保遺跡 (22) でも13軒で構成される集落が営まれている。西一里塚遺跡 (28) でも引き続き集落が営まれる。また、その北方田切り地形の末端部にあたる周防畑 (29-1・2)・円正坊 (30-3)・琵琶坂 (30-5) 遺跡でも集落形成が始まり、次第に佐久盆地の弥生時代居住域の主体が湯川沿い北方の田切り地形末端部に移り始めていることが看取できる。

このほか、北部ほど調査が進行していないが、佐久盆地南東部の野馬窪 (37)・樋村 (31)・上の台 (39)・平賀中屋敷 (40)・久瀬添 (42) 遺跡や南西部の西裏遺跡 (18) などでも当該期の集落遺跡が確認されており、中小規模の集落が形成され始めていたことがわかる。佐久盆地ではⅠ期においては北部地域を中心に集落が復活し、Ⅱ期においては佐久盆地全体にわたる開発が開始された時代だったとみることができる。



#### (4) 弥生時代後期中～後葉（佐久後期Ⅲ期古～佐久後期Ⅳ期新）【図5】

##### 弥生時代後期中葉（Ⅲ期古）

弥生後期Ⅲ期古の遺跡の発見例は、周防畑遺跡（29-1・2）以外では円正坊（30-3）・西一里塚（28）・西近津（34）遺跡などがあり、佐久盆地北部に偏在する状況にある。ただし、先代のⅡ期における佐久盆地全体への集落遺跡の広がり、次代の後期Ⅲ期新における佐久盆地全域への集落遺跡の広がりとは大規模化を考えるとⅢ期古の集落遺跡が佐久盆地南部に眠っている可能性も考えなければならない。

##### 弥生時代後期中葉（Ⅲ期新）

###### 佐久盆地北部

後期Ⅲ期新になると佐久盆地北部では、田切り地形末端部一帯に西近津遺跡（34）を頂点とする大規模集落遺跡が軒を連ねるように林立する。西近津遺跡では長野県埋蔵文化財センターによる中部横断道の発掘調査と佐久市教育委員会による周辺調査により、当該期の竪穴住居址が100軒以上みつかり、その中には長辺18mの日本最大級の竪穴住居址も存在することから田切り地形末端部における盟主的な集落であったことは疑いない。また、最近の市教委の調査により、この集落の周溝墓群からなる墓域が集落の西側にあることもわかってきた。

西近津遺跡から沢を隔てて南東に近接する周防畑遺跡群の宮の前・大豆田遺跡（29-3・4）は西近津よりも一回り小さい集落と考えられるが、竪穴住居群と方形・円形周溝墓が群在する墓域がセットになるまとまりが少なくとも3群は確認されている。

周防畑遺跡群の東隣の長土呂遺跡群は発掘が進行していないため詳細不明であるが、下聖壇遺跡（35-1）では当該期の小集落が確認されている。詳細分布調査の状況から相応の規模の集落が眠っている可能性が高い。

更に東隣の円正坊・枇杷坂遺跡群は、学史に残る「岩村田式土器」の出土地点でもある。遺跡群の南部に当たる清水田（30-1）・円正坊（30-3）遺跡などでは数字にわたる小規模調査の積み重ねによって、当該期の集落・墓域の存在が明らかになっているほか、遺跡群北部では、長辺10mの大型竪穴住居址から銅釦合計10輪を着装した遺体が見つかった話題となった上直路遺跡（30-4）も当該期の遺跡である。

円正坊・枇杷坂遺跡群の東側には岩村田遺跡群があり、現在の岩村田市街地と被るため、大規模な発掘歴に乏しいが、上木戸（36-1）、柳堂（36-2）遺跡では当該期の周溝墓が検出されており、遺跡群東側の湯川沿い（36-3）でも赤色塗彩土器が多数表面採集されているため、当該期の集落が存在する可能性が高い。

西一里塚遺跡（28）でも引き続き集落が営まれ、この時期には規模が大きくなっていった状況が垣間見える。

このように田切り地形末端部の台地上には弥生後期Ⅲ期新の集落が密集した状態で犇めきあっている可能性が高いことがわかってきた。一方、弥生中期後半の栗林2式新で一大集住地となり、後期集落の復活拠点でもあった湯川沿いの西一本柳遺跡一帯では、北西の久保遺跡（22）で23軒の竪穴住居址が見つかる程度で、田切り地形末端部に比べると閑散とした状況を呈する。

###### 佐久盆地南東部

後家山（9）、中堰遺跡（41）で当該期の集落が発掘されている。後家山遺跡はほぼ集落の全域が発掘調査されており、栗林期には2軒しかなかった竪穴住居址が後期Ⅲ期新では68軒の竪穴住居址が見つ



かっている。

#### 佐久盆地南西部

後沢（32）、舞台場（46）、榛名平（44）、勝間原・丸山（47）遺跡など八ヶ岳山塊から続く丘陵末端部に、弥生後期Ⅲ期新の集落遺跡が営まれている。後沢遺跡からは弥生時代の竪穴住居址が35軒検出され、そのうち32軒が後期後半のものとされているが正式報告がなされていないため、すべてが後期Ⅲ期新の竪穴住居址であるかは検証できない。舞台場遺跡では弥生時代の竪穴住居址13軒のほとんどが後期Ⅲ期新の竪穴住居址であるが、一部古墳前期Ⅰ期のものも混じっている。勝間原・丸山遺跡では各2軒の当該期の竪穴住居址がみつかっており、佐久盆地北部には及ばないが、それぞれの遺跡で相当数の集落経営が行われていたことがわかる。

以上のように後期Ⅲ期新は佐久盆地の後期弥生社会において、集落数・規模ともに最大値を示す時代である。それに伴う人口増加が、それまで空白に近かった上田盆地や群馬県甘楽・富岡地域の開発の契機になった可能性も考えられる。

#### 弥生時代後期後葉（Ⅳ期古）

後期Ⅳ期古になると、北一本柳遺跡（33）で370×200mの楕円形の環濠が掘削され、その内部には多くの竪穴住居が建造されている。その中の33号住居址は長辺が推定14mを測る大型竪穴住居で、コーナーの土壁には龕（ずし）のような収納施設が設けられ、その中に加耶産の板状鉄斧が納められていた。この時期では最大級の住居であり、多くの鉄製加工具の製造が可能なインゴットである板状鉄斧を保有する33号住居址は集落の首長層の居住施設と見て良いと思われる。

西一里塚遺跡（28）では、昭和49年に行われた発掘調査で検出された環濠がこの時期に掘削されたようだ。南北80m、東西150m以上の楕円形を呈すると推定され、北一本柳遺跡の環濠よりも一回り小さい。

中世～近世にかけて仙石秀久の開発により湖を干上がらせて水田化した佐久市五十貫地区を見下ろす高台にある戸坂遺跡でも弥生時代ではこの時期になって初めて環濠を巡らせた集落が営まれた。

前代で佐久盆地北部最大の集落を有した西近津遺跡は、Ⅲ期新の残影を残す程度の小規模集落となる。円正坊（30-3）・上直路（30-4）遺跡でも確実にこの時期の集落が存在するが、断片調査の為、その規模は計り切れない。

佐久盆地南東部では、榛名平遺跡（44）で後期Ⅳ期古を中心とした竪穴住居址が北東部で7軒、南西部で22軒検出されている。南西部の竪穴住居群には古墳前期Ⅰ期まで降るものもあり、竪穴住居群の北部には古墳時代前期Ⅱ期に方形周溝墓が構築された。

南西部ではこの時期の集落遺跡は確認されていない。

#### 弥生時代後期後葉（Ⅳ期新）

北一本柳遺跡の西方50mの間隔を置いて、西一本柳遺跡（21）でも255×190mの楕円形の環濠が掘削され、その内部には多くの竪穴住居が建造されている。北一本柳と西一本柳の環濠掘削の開始時期の前後関係は、今のところ定かでないが、廃絶時期は西一本柳の環濠から出土する土器の様相が新しい。このため、私は北一本柳と西一本柳の環濠集落は併存した時期もあるが、廃棄されたのは、北一本柳の方が早く、西一本柳遺跡の環濠集落の方が新しい時期（後期Ⅳ期新）まで残っていたと考える。円正坊

遺跡については前代のⅣ期古と同様で、西一里塚遺跡でもこの時期の集落がみつまっている。

西一里塚遺跡（28）での環濠集落の継続性は今のところ定かでない。

佐久盆地南東部では前代に引き続き榛名平遺跡で当該期の集落が継続して営まれたと考えられるが、出土土器の量が少なく判然としない。南西部では今後発見される可能性もあるが、今のところこの時期の集落遺跡は確認されていない。

#### （5）古墳時代前期（佐久古墳前期Ⅰ期古～前期Ⅲ期）【図6】

佐久盆地における古墳時代前期遺跡の遺跡分布（図6）と弥生後期の遺跡分布（図5）を比較すると一瞥しただけで大きな違いがあることに気付く。巨視的には、遺跡の分布範囲がより広域化して弥生時代後期には開発が及んでいなかった高所（軽井沢町県（81 標高 935m）、御代田町細田・下荒田（78・79 標高 810m・824m）、小諸市石神（65 標高 795m）・佐久市丸山Ⅱ（53 標高 810m）遺跡、立科町中原上・中村（82・83 685m・750m）遺跡、佐久市（旧望月町）平石・後沖（15・84 780m・785m）遺跡）や標高はさほど高くなくても弥生後期に全くの未開発であった土地（佐久市安原地区）の池畑（54）・宿上屋敷（55）・権現平（56）・池端城跡（57）遺跡、佐久市（旧浅科村周辺）の砂原、中平・田中島、土合、海戸田A・大ふけ（71～75）遺跡、小諸市南東部（御影新田・和田・耳取地区）の鎌田原・和田原・大塚原・竹花・大下原・野火附・油久保・五ヶ城・久保田（59～64・66～68）遺跡などにも居住地を求める傾向が見て取れる。これらは大きくて累積数10軒～20軒、高所に存する丸山Ⅱ遺跡や石神遺跡などは5軒にも満たない小規模集落で、弥生時代後期のように1時期50軒にも及ぶ大規模集落が営まれることはまずない。

微視的にみると、弥生時代後期に集落経営が活発だった土地を古墳後期Ⅰ期古でも再利用しているのは、清水田（30-1）・円正坊（30-3）遺跡くらいである。他は周防畑遺跡群ではかつての居住域を避けるかのように辻の前遺跡（29-5）があり、円正坊・枇杷坂遺跡群の南側に接する土地には松の木遺跡（49）がある。また、長土呂遺跡群の先端部には下伯母塚遺跡（35-2）がある。これらも、前述の遺跡と同様にいずれも10軒～20軒程度の集落（図7 松の木を例とする）である。

以上のような中小集落が佐久盆地から山辺までの各所に分散して、弥生時代ではできなかった広域な開発に挑んでいったことが分布状況から推測されるのである。その背後には、この時代に活発化する地域間交流の結果、新たな開発技術が導入され、稲作以外の生産活動も合わせて行われたであろうことは想像に難くない。

時期ごとに見ると古墳時代Ⅰ期の遺跡は佐久盆地北部から北方に多く分布するのに対し、古墳時代Ⅱ期の遺跡は佐久盆地南部に多い傾向がある。佐久盆地のⅠ期の集落の多くが長期継続していない状況であり、生業の行き詰まり等何らかの理由により、Ⅱ期には佐久盆地南部へ移動した可能性もある。

浅間山の噴火によるC軽石の降下の推定年代は3世紀後半であり、群馬県高崎市日高遺跡では古墳時代初頭の水田を覆っていることから、浅間山は古墳前期Ⅰ期からⅡ期の間に噴火した可能性が高い。佐久盆地平坦部での浅間山軽石の降下は、濁り遺跡で天明の噴火の噴出物とされる浅間山B軽石の存在の可能性が確認されている程度でABCいずれの軽石も層を成すような堆積は確認されていない。したがって、佐久盆地ではC軽石を噴出した古墳時代前期の噴火においても群馬県のように激しく火山灰・軽石が降り続いた状況はなかったと考えられる。群馬県ではC軽石降下以降も開発の速度が落ちることなく、たくましく集落規模を拡大して多くの巨大古墳の築造を行っていったプロセスが確認されてい



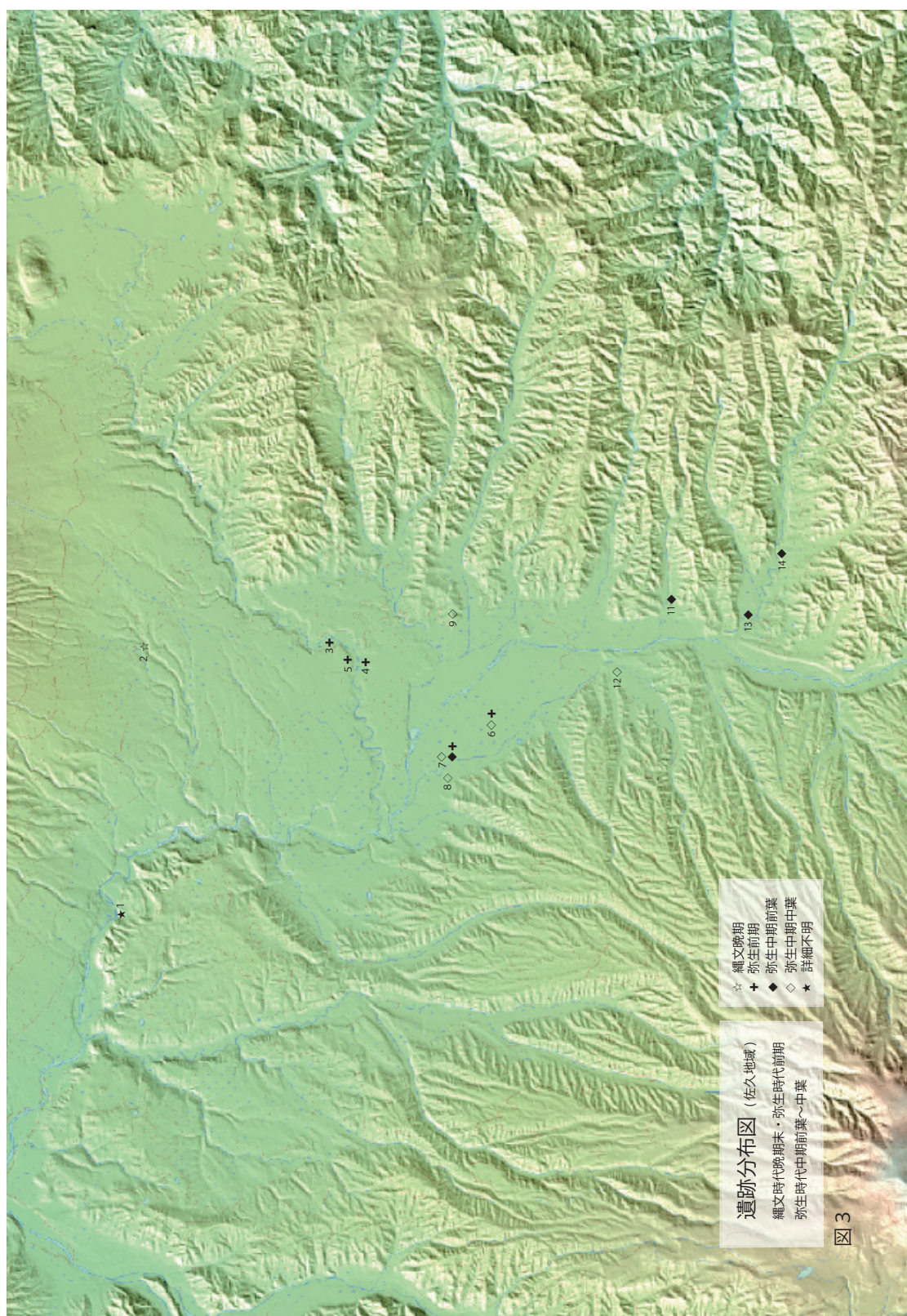
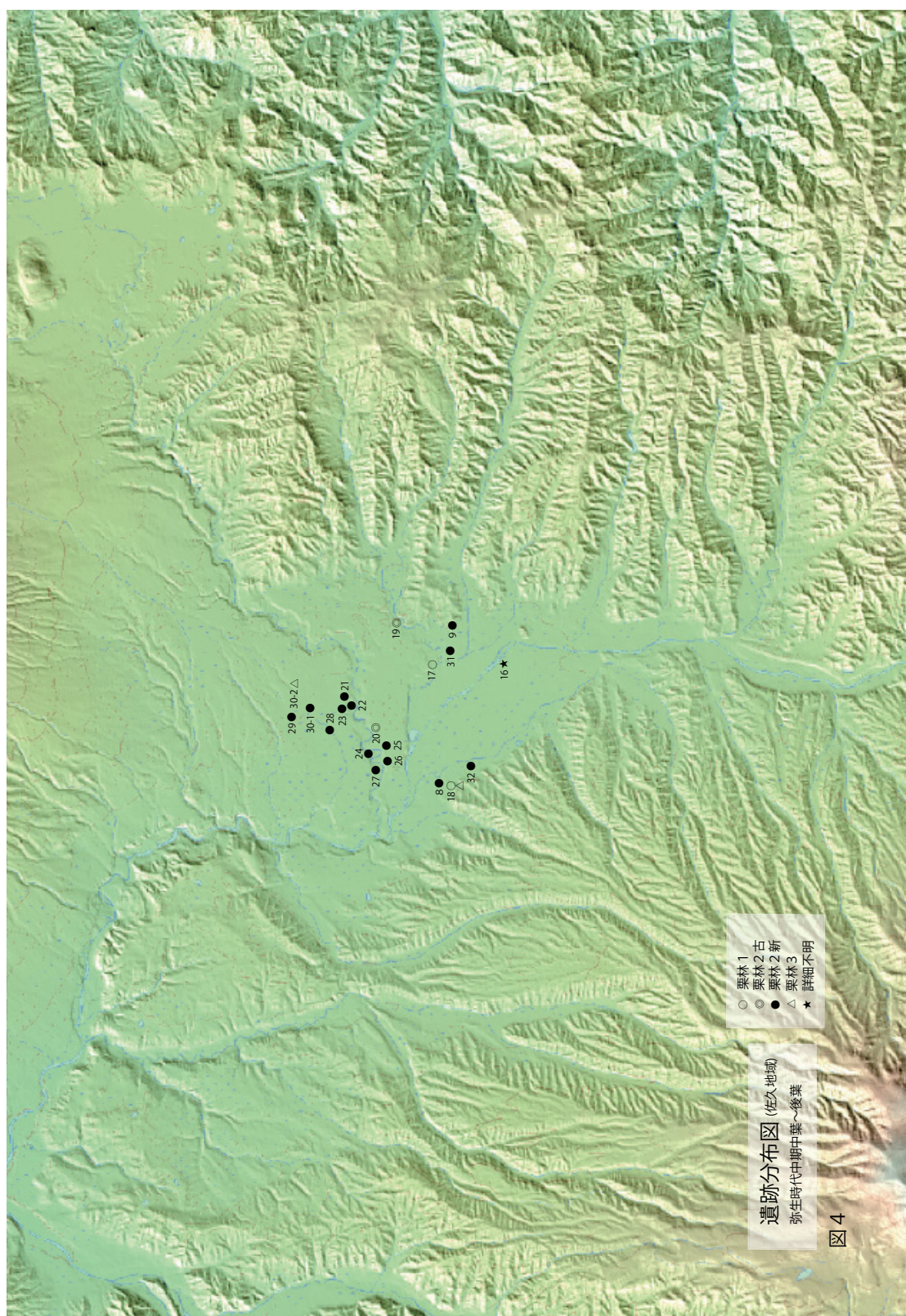
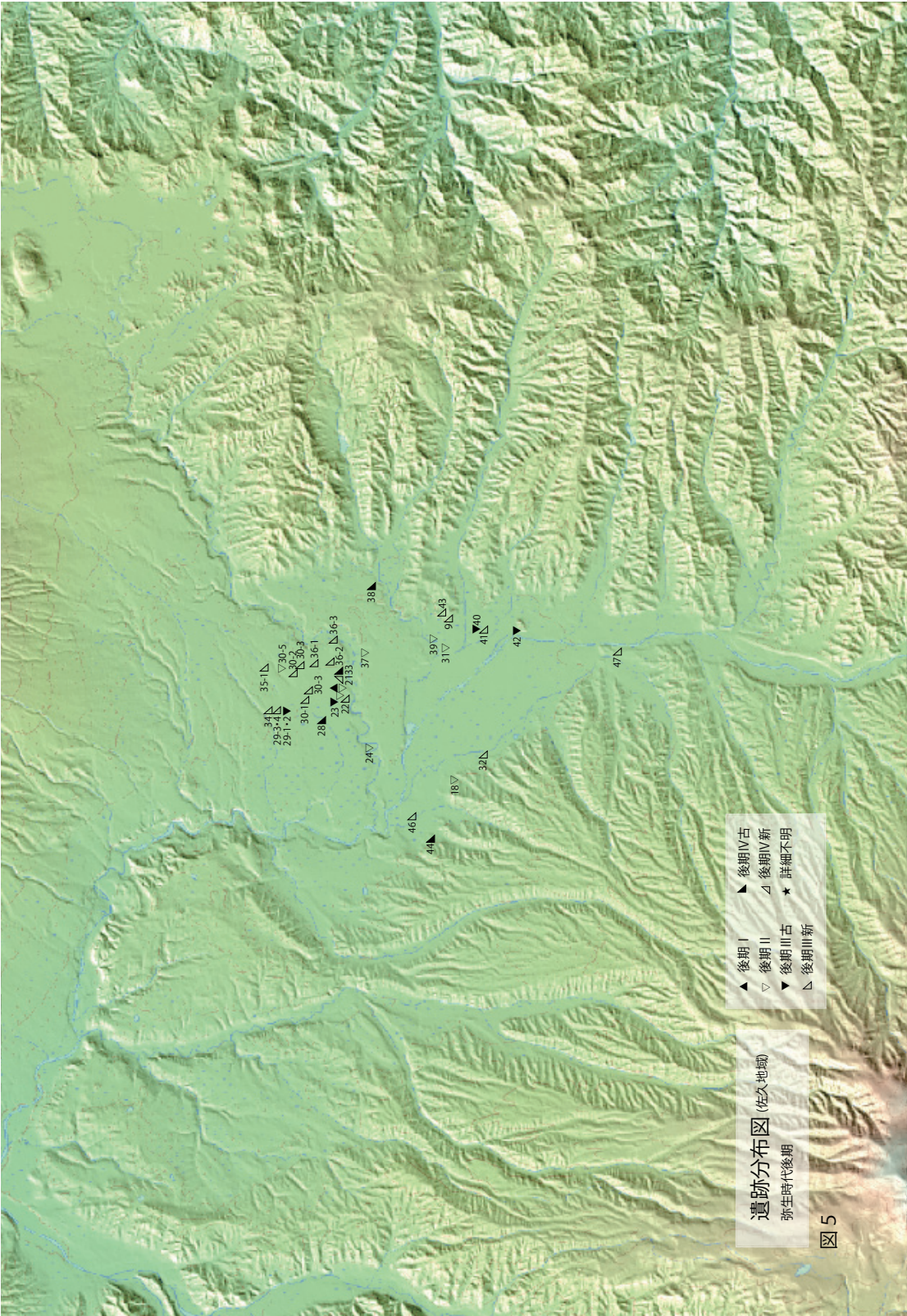


図 3











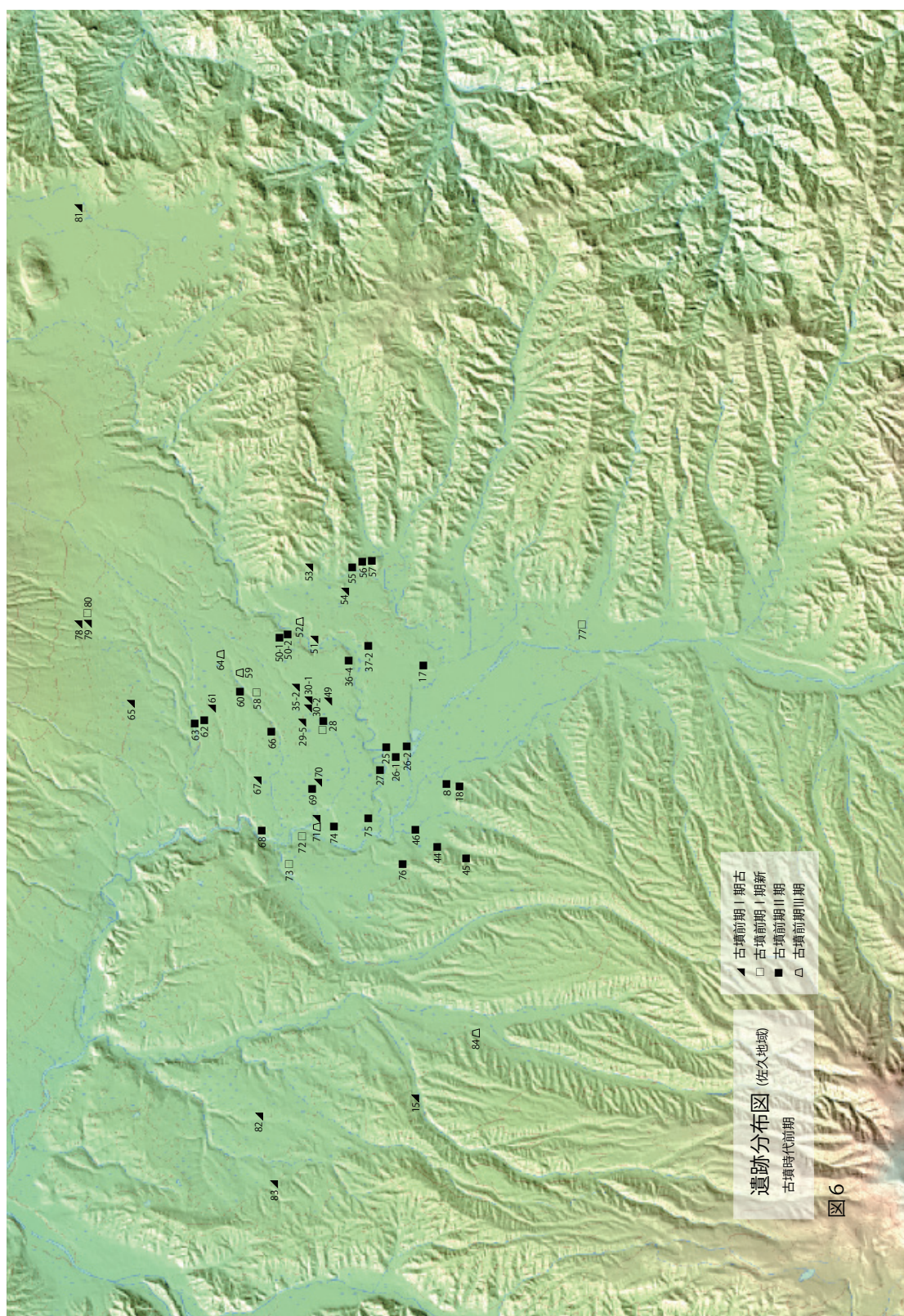


表2 長野県佐久地域弥生～古墳時代前期遺跡一覧

No	遺跡名	枝番	地点名	時 期	型 式	立 地	住 所	標 高
1	氷			縄文晩期末	氷Ⅰ式	千曲川左岸の山間部	小諸市氷	600m
2	戻場			縄文晩期末	氷Ⅰ式	練矢川の第2段丘	御代田町馬瀬口	785m
3	下信濃石			弥生前期末	氷Ⅱ式	湯川右岸の第1段丘	佐久市岩村田	695m
4	仲田			弥生前期末	氷Ⅱ式	湯川右岸の第1段丘	佐久市岩村田	676m
5	東大門先			弥生前期末	氷Ⅱ式	湯川右岸の第2段丘 田切り台地	佐久市岩村田	699m
6	東五里田			弥生前期末	氷Ⅱ式	千曲川左岸の沖積地	佐久市野沢	673m
7	平馬塚			弥生前期末 弥生中期中葉	氷Ⅱ式 ほうろく屋敷段階 境窪段階	千曲川左岸の沖積地	佐久市桜井	652m
8	宮浦			弥生中期中葉 弥生中期後葉 古墳前期中葉	池上式(新)併行 栗林2式新 Ⅱ期	千曲川左岸の沖積地	佐久市桜井	659m
9	後家山			弥生中期中葉 弥生中期後葉 弥生後期中葉	神保富士塚併行 栗林2式新 Ⅲ期新	佐久東部山地の尾根支脈末端部 滑津川を望む丘陵上	佐久市平賀	708m 前後
10	矢出川南			弥生前期末	氷Ⅱ式	矢出川沿い		1347m
11	月夜平			弥生中期中葉	—	千曲川右岸の段丘	佐久市臼田	760m
12	反田			弥生中期中葉	境窪併行	千曲川左岸の丘陵上	佐久市下小田切	712m
13	中原			弥生中期前葉	—	抜井川南岸の段丘	佐久穂町海瀬	800m
14	館			弥生中期前葉	—	抜井川南岸の段丘	佐久穂町海瀬	830m
15	平石			弥生中期中葉 古墳前期前葉	— Ⅰ期	八丁地川左岸河岸段丘	佐久市協和	780m
16	社宮司			弥生中期	時期が絞り込めない	千曲川左岸の沖積地	佐久市野沢	682m
17	深堀			弥生中期中葉 古墳前期中葉	栗林1式 Ⅱ期	滑津川右岸の第2段丘上	佐久市中込	680m
18	北裏・西裏			弥生中期中葉 弥生中期後葉 弥生後期前葉 古墳前期中葉	栗林1式 栗林2式新～3式 Ⅱ期 Ⅱ期	片貝川の沖積地	佐久市伴野	665m
19	和田上			弥生中期後葉	栗林2式古	志賀川右岸の第2段丘上	佐久市瀬戸	700m
20	根乃井芝宮			弥生中期後葉	栗林2式古	湯川左岸の第2段丘上	佐久市根乃井	680m
21	西一本柳			弥生中期後葉 弥生後期前葉	栗林2式新 Ⅰ期 Ⅱ期 Ⅳ期新	湯川右岸の第2段丘上	佐久市岩村田	690m
22	北西の久保			弥生中期後葉 弥生後期前葉 弥生後期中葉	栗林2式新 Ⅱ期 Ⅲ期新	湯川右岸の第2段丘上	佐久市岩村田	690m
23	五里田			弥生中期後葉 弥生後期中～後葉	栗林2式新 Ⅲ期新～Ⅳ期	湯川右岸の第2段丘上	佐久市根乃井	683m
24	森平			弥生中期後葉 弥生後期	栗林2式新 Ⅱ期	湯川左岸の第1段丘上	佐久市横和	659m
25	寄塚			弥生中期中葉 古墳前期中葉	栗林2式新 Ⅱ期	湯川左岸の第2段丘上	佐久市横和	671m
26	白山	1 下原 2 今井西原		弥生中期後葉 古墳前期中葉 古墳前期中葉	栗林2式新 Ⅱ期 Ⅱ期	湯川左岸の第2段丘上	佐久市三河田・横和	668m
27	川原端			弥生中期後葉 古墳前期中葉	栗林2式新 Ⅱ期	湯川左岸の第2段丘上	佐久市鳴瀬	648m
28	西一里塚			弥生中期後葉 弥生後期前葉 弥生後期中葉 弥生後期後葉 古墳前期前葉 古墳前期中葉	栗林2式新 Ⅰ期 Ⅱ期 Ⅲ期古 Ⅲ期新 Ⅳ期 Ⅰ期 Ⅱ期	濁川沿いの田切り台地	佐久市岩村田	702m
29	周防畑	1 高速道 2 周防畑B 3 宮の前 4 大豆田 5 辻の前		弥生中期後葉 弥生後期前葉 弥生後期中葉 弥生後期中葉 古墳前期前葉	栗林2式新 Ⅱ期～Ⅲ期古 Ⅱ期～Ⅲ期古 Ⅲ期新 Ⅲ期新 Ⅰ期古	濁川沿いの田切り台地	佐久市長土呂	702m 705m 710m 704m 699m
30	円正坊・枇杷坂	1 清水田 2 直路 3 円正坊 4 上直路 5 琵琶坂		弥生中期後葉 弥生後期中葉 古墳前期前葉 弥生中期後葉 弥生後期前葉 弥生後期中葉 弥生後期後葉 古墳前期前葉 弥生後期中葉 弥生後期後葉 古墳前期前葉	栗林2式新 Ⅲ期新 Ⅰ期古 栗林3式 Ⅰ期 Ⅱ期 Ⅲ期古 Ⅲ期新 Ⅳ期古 Ⅳ期新 Ⅰ期古 Ⅲ期新 Ⅳ期古 Ⅱ期	蟹沢沿いの田切り台地	佐久市岩村田	700m 708m 704m 715m 720m



No	遺跡名	枝番	地点名	時 期	型 式	立 地	住 所	標 高
31	樋村			弥生中期後葉 弥生後期前葉	栗林2式新 Ⅱ期	志賀川沿いの沖積地	佐久市平賀	672m
32	後沢			弥生中期後葉 弥生後期中葉	栗林2式新 Ⅲ期新	片貝川を望む丘陵末端部	佐久市小宮山	700m
33	北一本柳			弥生後期後葉	Ⅳ期古	湯川右岸の第2段丘 田切り台地	佐久市岩村田	
34	西近津			弥生後期中葉 弥生後期後葉	Ⅲ期古 Ⅲ期新 Ⅳ期古	湧玉川沿いの田切り台地	佐久市長土呂	居住城西 側に墓域 (円形周 溝墓群) 705m
35	長土呂	1 2	下聖端 下伯母塚	弥生後期中葉 古墳前期前葉	Ⅲ期新 Ⅰ期古	濁川沿いの田切り台地 蟹沢沿いの田切り台地	佐久市長土呂	705m
36	岩村田	1 2 3 4	上木戸 柳堂 採集地 西八日町	弥生後期中葉 弥生後期中葉 弥生後期中葉？ 古墳前期前葉 古墳前期中葉	Ⅲ期新 Ⅲ期新 Ⅲ期新？ Ⅰ期古 Ⅱ期	蟹沢沿いの田切り台地 蟹沢沿いの田切り台地 湯川沿いの田切り台地 湯川沿いの田切り台地	佐久市岩村田	714m 704m 707m 701m
37	野馬窪	1 2	野馬窪 採集地	弥生後期前葉 古墳前期中葉	Ⅱ期 Ⅱ期	湯川左岸の第2段丘 田切り台地	佐久市猿久保	695m
38	戸坂			弥生後期後葉	Ⅳ期古	志賀川右岸の第2段丘上 田切り台地	佐久市新子田	705m
39	上の台			弥生後期前葉	Ⅱ期	志賀川沿いの沖積地	佐久市平賀	673m
40	平賀中屋敷			弥生後期前葉	Ⅱ期	田子川内山川に挟まれた沖積地	佐久市平賀	688m
41	中堰			弥生後期中葉	Ⅲ期新	田子川内山川に挟まれた沖積地	佐久市平賀	687m
42	久瀬添			弥生後期前葉	Ⅱ期	千曲川左岸の沖積地	佐久市太田部	687m
43	東久保			弥生後期中葉	Ⅲ期新	佐久東部山地の尾根支脈末端部 滑津川を望む丘陵上	佐久市平賀	730m
44	榛名平			弥生後期後葉 古墳前期中葉	Ⅳ期古 Ⅱ期	千曲川左岸の丘陵上	佐久市根岸	680~ 710m
45	瀧の峯			古墳前期中葉	Ⅱ期	千曲川左岸の丘陵上	佐久市根岸	800m
46	舞台場			弥生後期後葉 古墳前期中葉	Ⅲ期新 Ⅱ期	千曲川左岸の丘陵上	佐久市岸野	646m
47	勝間原・丸山			弥生後期後葉	Ⅲ期新	千曲川左岸の丘陵上	佐久市下小田切	720m
48	根乃井大塚			古墳前期前葉	Ⅰ期古	湯川右岸の第2段丘上 田切り台地	佐久市根乃井	690m
49	松の木			古墳前期前葉	Ⅰ期古～新	蟹沢沿いの田切り台地	佐久市岩村田	694m
50	栗毛坂	1 2	A B	古墳前期中葉 古墳前期前葉 古墳前期中葉	Ⅱ期 Ⅰ期古 Ⅱ期	湯川右岸の第1段丘上 湯川右岸の第2段丘上 田切り台地	佐久市岩村田	703m 727m
51	下小平			古墳前期前葉 古墳前期中葉	Ⅰ期古 Ⅱ期	湯川左岸の第2段丘上 田切り台地	佐久市岩村田	706m
52	腰巻			古墳前期前葉 古墳前期中葉 古墳前期後葉	Ⅰ期古 Ⅱ期 Ⅲ期	湯川左岸の第1段丘上	佐久市上平尾	715m
53	丸山Ⅱ			古墳前期前葉	Ⅰ期	平尾山裾野の丘陵頂部	佐久市下平尾	810m
54	池畑			古墳前期前葉	Ⅰ期古	霞川沿いの田切り台地	佐久市安原	710m
55	宿上屋敷			古墳前期中葉	Ⅱ期	霞川沿いの田切り台地	佐久市安原	702m
56	権現平・池端			古墳前期中葉	Ⅱ期	霞川左岸の丘陵上	佐久市安原	703m
57	池端城址			古墳前期中葉	Ⅱ期	霞川左岸の丘陵上	佐久市安原	700m
58	近津			古墳前期中葉	Ⅰ期新	湧玉川沿いの田切り台地	佐久市長土呂	730m
59	鎌田原			古墳前期後葉	Ⅲ期	湧玉川沿いの田切り台地	小諸市御影新田	781m
60	和田原			古墳前期前中葉	Ⅱ期	湧玉川沿いの田切り台地	小諸市和田	735m
61	大塚原			古墳前期前葉	Ⅰ期古	皿掛川左岸の第2段丘上 田切り台地	小諸市御影新田	732m
62	竹花			古墳前期中葉	Ⅱ期	鎌矢川左岸の第2段丘上 田切り台地	小諸市御影新田	724m
63	大下原			古墳前期中葉	Ⅱ期	鎌矢川右岸の第2段丘上 田切り台地	小諸市平原	730m
64	野火附			古墳前期後葉	Ⅲ期	湧玉川沿いの田切り台地	小諸市御影新田	754m
65	石神			古墳前期前葉	Ⅰ期古	浅間山麓の細尾根	小諸市八満	795m
66	油久保			古墳前期中葉	Ⅱ期	湧玉川沿いの田切り台地	小諸市和田原	701m
67	五ヶ城			古墳前期前葉	Ⅰ期古	皿掛川右岸の田切り台地	小諸市市	672m
68	久保田			古墳前期中葉	Ⅱ期	千曲川右岸の沖積地	小諸市耳取	630m
69	藤塚			古墳前期中葉	Ⅱ期	千曲川右岸の田切り台地	佐久市塚原・常田	678m
70	前田			古墳前期前葉	Ⅰ期古	千曲川右岸の田切り台地	佐久市塚原	664m
71	砂原			古墳前期前葉 古墳前期後葉	Ⅰ期古 Ⅲ期	千曲川右岸の沖積地	佐久市塩名田	621m
72	中平・田中島			古墳前期前葉	Ⅰ期新	千曲川左岸の沖積地	佐久市御馬寄	634m
73	土合			古墳前期前葉	Ⅰ期	布施川右岸の台地	佐久市浅科甲	650m
74	海戸田A			古墳前期中葉	Ⅱ期	千曲川右岸の沖積地	佐久市塩名田	633m
75	大ふけ			古墳前期中葉	Ⅱ期	千曲川右岸の沖積地	佐久市鳴瀬	636m
76	石附			古墳前期中葉	Ⅱ期	千曲川左岸の丘陵	佐久市根岸	680m
77	原			古墳前期前葉	Ⅰ期	千曲川右岸の沖積地	佐久市臼田原	707m
78	細田			古墳前期前葉	Ⅰ期古	榛木沢沿いの田切り台地	御代田町塩野	810m
79	下荒田			古墳前期前葉	Ⅰ期古	榛木沢沿いの田切り台地	御代田町塩野	824m
80	塚田			古墳前期前葉	Ⅰ期新	榛木沢沿いの田切り台地	御代田町塩野	817m
81	県			古墳前期前葉	Ⅰ期古	浅間山南東麓の田切り台地縁辺	軽井沢町長倉	935m
82	中原上			古墳前期前葉	Ⅰ期古～新	番屋川支流沿いの台地	立科町古町	685m
83	中村			古墳前期前葉	Ⅰ期古～新	蓼科山から北方へ延びる丘陵上	立科町山部	750m
84	後沖			古墳前期後葉	Ⅲ期	蓼科山から北方へ延びる尾根状台地	佐久市春日	785m



る状況を鑑みれば、火山灰降下のほとんどなかった佐久地域が浅間山の噴火の影響で集落規模が衰退していった可能性は低い。

佐久盆地の古墳時代前期を通じていえる特長は、数多く営まれた小規模集落は存続時期が短く、次代に継承されていかないことにあり、この状況からみて当時の生産性の低さは否定できない状況にある。特に古墳Ⅲ期の遺跡は、再び場所を違えて佐久盆地北部に少数みられるに過ぎなくなる。古墳時代前期は弥生時代中期末～後期Ⅰ期以来のしほみ現象を示す時代である。

なお、古墳Ⅱ期初頭には佐久盆地南西部の山上に瀧の峯古墳群が築かれている。弥生時代の墓域は、集落に接していた。集落域から離れた場所に墳丘長 20m 近い大型墳墓が複数基築かれている状況は、この時期佐久盆地にも共同墓地を離れた特定集団の上位階層墓が出現したことを示唆している。古墳時代前期に至って佐久盆地でも特定集団の上位階層主導による、共同土地開発が開始された可能性を示唆しているようにも思われる。

## 5 千曲川流域の他地域との比較

ここからは千曲川下流域上田・長野盆地の状況を見て、比較を試みる。

### (1) 上田盆地【図8・9】

#### ①上田盆地の概要

上田盆地では、前期末においては右岸神川流域の林之郷遺跡(202)、左岸産川・浦野川の合流地点に当たる上田原遺跡(203)などで弥生前期末水Ⅱ式土器が検出されているが、これらは長期継続せず、沖積地においては中期前葉～中葉の遺構・遺物は皆無に近い状況となる。中期後葉の栗林式2式以降になっても右岸八幡裏遺跡(204)で栗林2式新～3式の土器と榎田産磨製石斧1点のほかは、既出資料がわずかにみられる程度である。ここまで発掘調査が進んでいる現在、上田盆地には栗林期のまとまった集落の形成はなかったとみるのが妥当である。

この後、後期前葉(Ⅰ・Ⅱ期)になっても上田盆地における空白は続く。空白の要因については、上田盆地において右岸に比して大きな水田可耕地塩田平を有する左岸地域は、中期後葉～後期前葉にかけて安定した水田経営を行える条件になかったことが推測できる。すなわち、左岸の主要河川である産川や浦野川の洪水が収まっていなかったことが、当該期の開発に大きな妨げになっていた可能性が考えられるのである。

#### ②佐久盆地との比較

上田盆地で集落形成が始まるのは弥生後期中葉のⅢ期古以降と考えられ、活発化するのⅢ期新以降である。上田盆地の沖積地は千曲川を挟んで南北に分かれているが、そのいずれにおいても後期Ⅲ期新



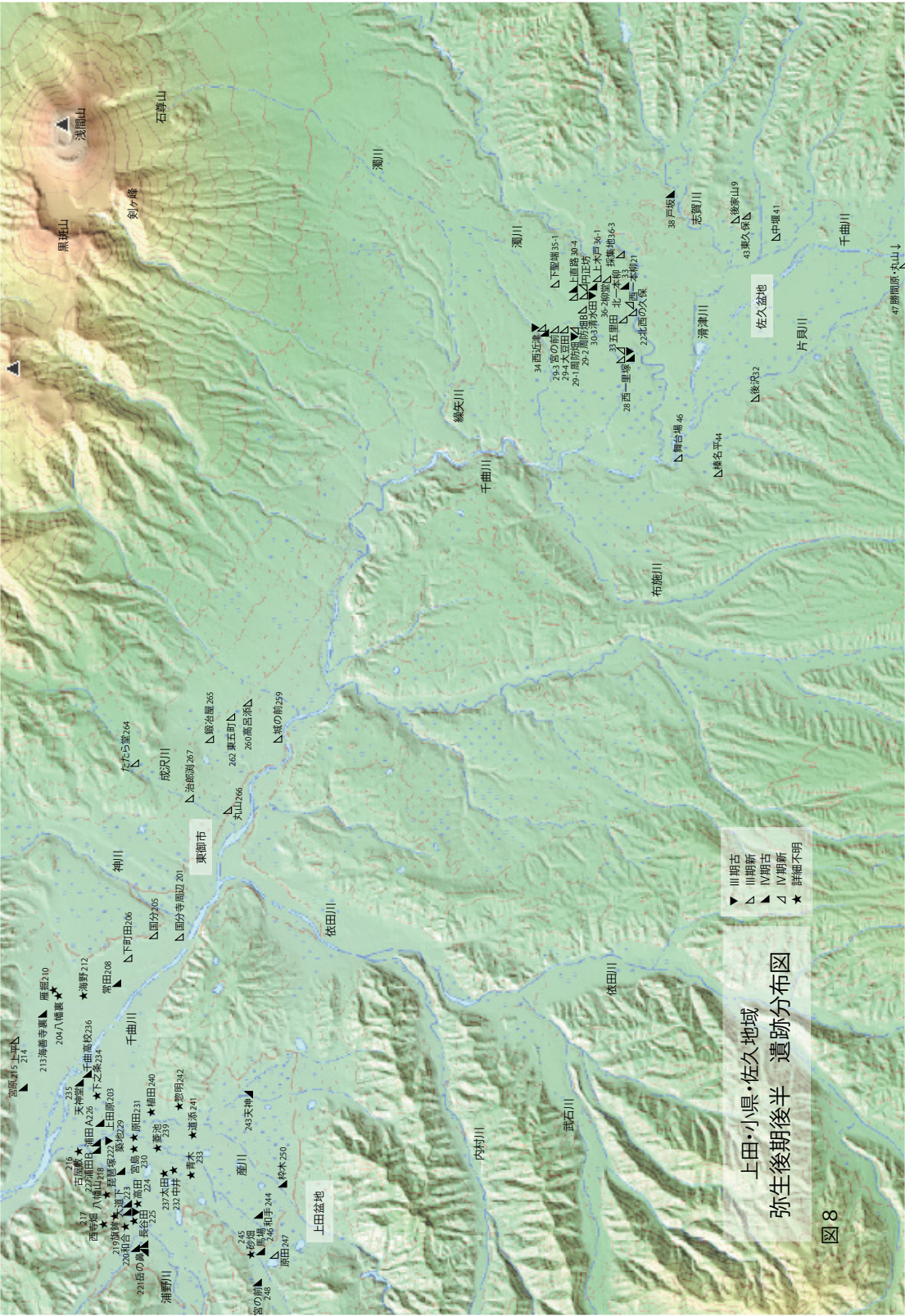
弥生後期集落密集地(枇杷坂遺跡群と岩村田遺跡群)の間隙に営まれた集落の一例。古墳時代Ⅰ期古を中心とする13軒の竪穴住居址群が検出された。北側に同時期の住居址が2軒ある。M1の南側には住居址がない。居住域は東西にさらに広がる。現状では大きな建物はない。この時期では大きな居住域である。

図7 松の木遺跡全体図

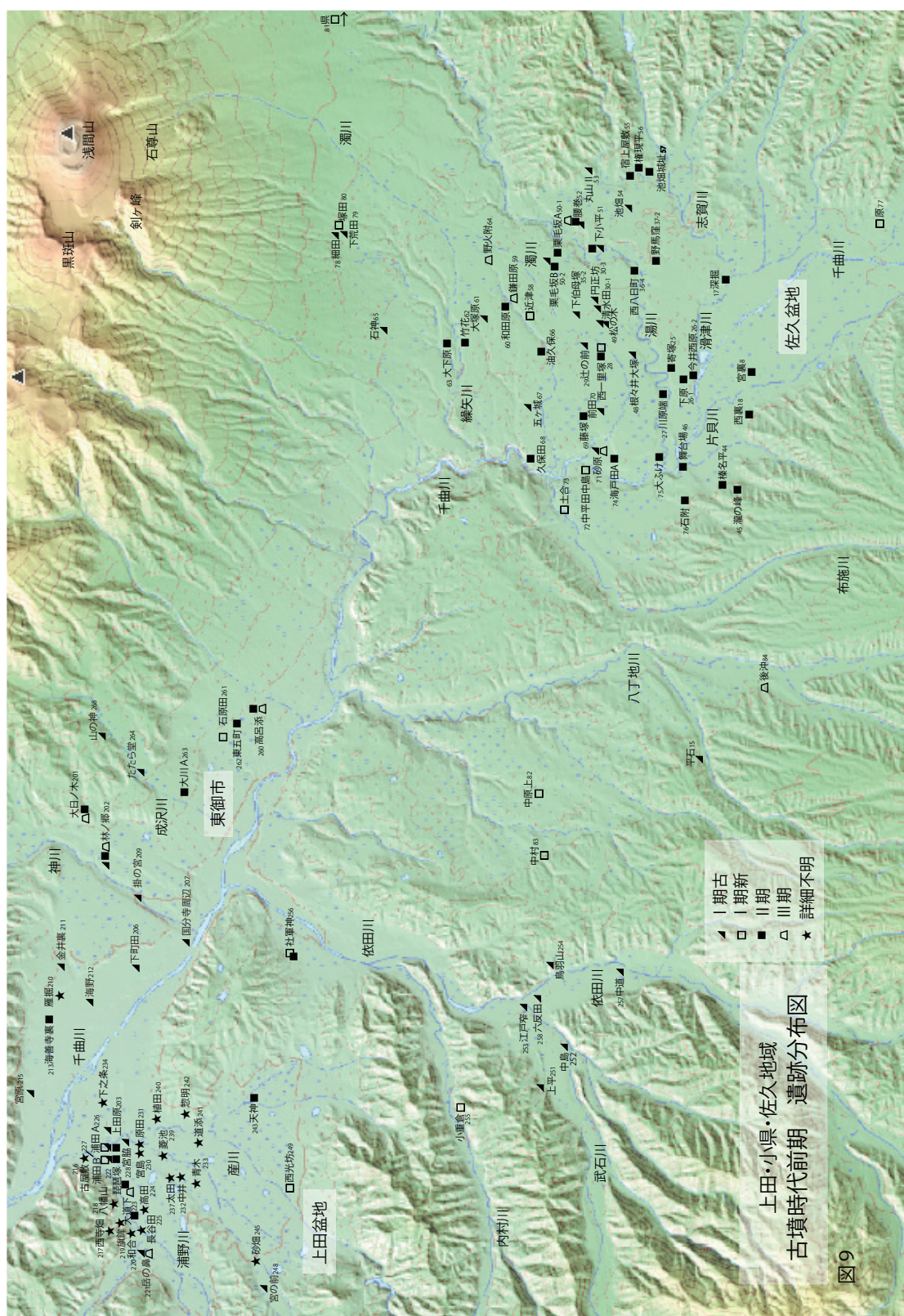
表 3 長野県上小地域弥生～古墳時代前期遺跡一覧

No	遺跡名	時 期	型 式	立 地	住 所	標高等
201	大日の木	縄文晩期末 古墳前期中葉 古墳前期後葉	氷Ⅰ式 Ⅱ期 Ⅲ期	千曲川右岸 扇状地の扇頂部	上田市芳田	640m
202	林ノ郷	弥生前期末 古墳前期前葉 古墳前期中葉 古墳前期後葉	氷Ⅱ式 Ⅰ期古 Ⅱ期 Ⅲ期	千曲川右岸 神川左岸	上田市常入	600m
203	上田原	弥生前期末 弥生後期後葉 古墳前期前葉	氷Ⅱ式 佐久Ⅲ期新 Ⅰ期古	千曲川左岸の産川右岸沖積地	上田市	鉄矛 445m
204	八幡裏	弥生中期後葉	栗林2式新	千曲川右岸	上田市	465m
205	国分遺跡群	弥生後期後葉	Ⅲ期新以降	千曲川右岸	上田市	476m
206	下町田	弥生後期後葉 古墳前期前葉	Ⅲ期新 Ⅰ期古	千曲川右岸	上田市常入	499m
207	国分周辺	弥生後期後葉 古墳前期前葉	Ⅲ期古～新 Ⅰ期古～新	千曲川右岸	上田市国分	471m
208	常田	弥生後期後葉	Ⅲ期新以降	千曲川右岸	上田市古里	535m
209	掛の宮	古墳前期前葉	Ⅰ期古	千曲川右岸 神川沿い	上田市	
210	雁堀	詳細不明		千曲川右岸	上田市	
211	金井裏	古墳前期前葉	Ⅰ期古	千曲川右岸	上田市上田	500m
212	海野	詳細不明		千曲川右岸	上田市	
213	海善寺裏	弥生後期後葉 古墳前期中葉	Ⅲ期新 Ⅱ期	千曲川右岸	上田市上田	473m
214	上平	弥生後期後葉	Ⅲ期新以降	千曲川右岸	上田市常盤城	550m
215	宮原	弥生後期後葉 古墳前期前葉	Ⅳ期 Ⅰ期古	千曲川右岸	上田市天神	438m
216	古屋敷	詳細不明		千曲川左岸浦野川左岸丘陵末端	上田市	
217	西寺畑	詳細不明		千曲川左岸浦野川左岸丘陵末端	上田市小泉	
218	八幡山	詳細不明		千曲川左岸浦野川左岸丘陵末端	上田市小泉	
219	旗鉾	詳細不明		千曲川左岸浦野川左岸丘陵末端	上田市小泉	
220	和合	詳細不明		千曲川左岸浦野川左岸丘陵末端	上田市小泉	
221	岳の鼻	弥生後期後葉 古墳前期前葉 古墳前期後葉	Ⅲ期新 Ⅳ期古～新 Ⅰ期古 Ⅲ期	千曲川左岸浦野川左岸丘陵末端	上田市下室賀	470m
222	琵琶塚	弥生後期後葉 古墳前期中葉 古墳前期後葉	Ⅳ期古 Ⅱ期 Ⅲ期	千曲川左岸浦野川右岸沖積地	上田市小泉	445m
223	大道下	弥生後期後葉 古墳前期中葉	Ⅲ期古 Ⅲ期新 Ⅳ期古 古墳前期Ⅱ	千曲川左岸浦野川右岸沖積地	上田市小泉	450m
224	高田	詳細不明		千曲川左岸浦野川右岸沖積地	上田市小泉	
225	長谷田	詳細不明		千曲川左岸浦野川右岸沖積地	上田市小泉	
226	浦田 A	弥生後期後葉 古墳前期前葉 古墳前期中葉	Ⅲ期新 Ⅰ期古 Ⅰ期新 Ⅱ期	千曲川左岸 浦野川と産川の合流地点沖積地	上田市築地	430m
227	浦田 B	弥生後期後葉 古墳前期前葉 古墳前期中葉	Ⅳ期以降 Ⅰ期古 Ⅰ期新 古墳Ⅱ期	千曲川左岸 浦野川と産川の合流地点沖積地	上田市築地	430m
228	宮脇	古墳前期前葉	Ⅰ期古	千曲川左岸浦野川左岸	上田市吉田	437m
229	駕籠田（築地）	弥生後期後葉	Ⅳ期古	千曲川左岸浦野川左岸	上田市築地	441m
230	宮島	詳細不明		千曲川左岸浦野川左岸	上田市	
231	原田	詳細不明		千曲川左岸浦野川左岸	上田市	
232	中井	弥生後期後葉	散布 詳細不明	千曲川左岸浦野川左岸	上田市中之条田	450m
233	青木	詳細不明		千曲川左岸浦野川左岸	上田市	
234	下之条条里	詳細不明		千曲川左岸沖積地	上田市	
235	天神堂	弥生後期後葉	Ⅳ期	千曲川左岸沖積地	上田市中之条	432m
236	千曲高校	弥生後期後葉	Ⅲ期新～Ⅳ期	千曲川左岸沖積地	上田市中之条	432m
237	太田	詳細不明		千曲川左岸産川左岸	上田市	









No	遺跡名	時 期	型 式	立 地	住 所	標高等
238	向村	弥生後期後葉	Ⅲ期新～Ⅳ期	千曲川左岸産川左岸	上田市神畑	447m
239	菱池	詳細不明		千曲川左岸産川左岸	上田市	
240	植田	詳細不明		千曲川左岸産川左岸	上田市	
241	道添	詳細不明		千曲川左岸産川左岸	上田市	
242	惣明	詳細不明		千曲川左岸産川右岸	上田市	
243	天神	弥生後期後葉～ 古墳前期中葉	Ⅳ期新～ Ⅱ期	千曲川左岸産川右岸	上田市富士山	478m
244	和手	弥生後期後葉	Ⅳ期古	千曲川左岸追開沢川左岸沖積地	上田市中野	488m
245	砂畑	詳細不明		千曲川左岸腰巻川周辺沖積地	上田市別所温泉周辺	
246	馬場	弥生後期後葉	Ⅲ期新～Ⅳ期	千曲川左岸腰巻川周辺沖積地	上田市八木沢	505m
247	原田	弥生後期後葉	Ⅲ期新～Ⅳ期	千曲川左岸腰巻川周辺沖積地	上田市山田	510m
248	宮の前	弥生後期後葉 古墳前期前葉	Ⅳ期 Ⅰ期古	千曲川左岸腰巻川周辺沖積地	上田市別所	525m
249	西光坊	古墳前期前葉	Ⅰ期新	千曲川左岸産川沿い	上田市上本郷	480m
250	梓木	弥生後期後葉	Ⅳ期以降	千曲川左岸産川沿い	上田市上本郷	484m
251	上平	古墳前期前葉	Ⅰ期古	武石川左岸の河岸段丘上	上田市下武石	巴形銅器 680m
252	中島	古墳前期前葉	Ⅰ期古	武石川左岸の河岸段丘上	上田市下武石	630m
253	江戸竈	古墳前期前葉	Ⅰ～Ⅱ期	武石川左岸の河岸段丘上	上田市下武石	610m
254	鳥羽山洞窟	古墳前期前葉	Ⅰ期以降	依田川の名勝「飛魚」付近	上田市腰越	590m
255	小重倉洞窟	古墳前期前葉	Ⅰ期以降	内村川右岸	上田市東内	590m
256	社軍神	古墳前期前中葉	Ⅰ期以降	依田川左岸	上田市依田	510m
257	中道	古墳前期前葉	Ⅰ期古	依田川左岸	長和町古町	635m
258	六反田	古墳前期前葉	Ⅰ期以降	依田川左岸	上田市古町	592m
259	城の前	弥生後期後葉	Ⅲ期新	千曲川右岸	東御市田中	535m
260	高呂添	弥生後期後葉 古墳前期中葉 古墳前期後葉	Ⅲ期新 Ⅱ期 Ⅲ期	千曲川右岸	東御市田中	580m
261	石原田	古墳前期前葉	Ⅰ期古	千曲川右岸 求女川沿い	東御市新屋	560m
262	東五町	弥生後期後葉 古墳前期中葉	Ⅲ期新 Ⅱ期	千曲川右岸 求女川沿い	東御市田中	575m
263	大川 A	古墳前期中葉	Ⅱ期	千曲川右岸 大川沿い	東御市和	630m
264	たたら堂	弥生後期後葉～ 古墳前期前葉	Ⅳ期新～ Ⅰ期古	千曲川右岸 成沢川沿い	東御市和	700m
265	鍛冶屋	弥生後期後葉 古墳前期中葉	Ⅳ期 Ⅱ期	千曲川右岸 成沢川沿い	東御市和	560m
266	丸山	弥生後期後葉	Ⅳ期	千曲川右岸	東御市	
267	治郎湖	弥生後期後葉	Ⅲ期新～Ⅳ期	千曲川右岸	東御市	
268	山の神	古墳前期前葉	Ⅰ期	千曲川右岸	東御市	

以降遺跡が増加する。積極的な集落形成は後期Ⅳ期、さらには古墳時代前期Ⅱ期まで継続する。

佐久盆地では、前述のように弥生後期集落遺跡と古墳前期集落遺跡が複合することは少なかったが、上田盆地ではむしろ複合することが通常である。

この相違点については、

- ①上田盆地でも特に左岸の塩田平は沖積地であるため、火山灰地帯の佐久盆地北部よりも地力が勝っていたこと及び、水田等の開発が佐久盆地よりも遅れたため土地の疲弊が軽度であったこと
- ②佐久盆地の弥生後期集落は標高が700m 前後の土地にあるのに対し、上田盆地は500m 前後でこの時期の気候冷涼化の影響を被りづらかったこと
- ③上田盆地では、古墳前期に至ると北陸系土器をはじめ東海・畿内など外来系土器の出土が顕著であり、逆に佐久盆地は外来系土器の受容が緩慢な地域である。水利・施肥など外来の農業技術の受容が上田盆地の土地の疲弊や気候の冷涼化を補った可能性

など複数の要因が考えられる。

このほか、上田地域の古墳時代前期は弥生後期後葉の千曲川右岸・左岸の標高500m 程度の沖積地の

活発な開発を引き継ぐとともに、大日ノ木遺跡（201）に象徴されるようにそれまで、弥生時代においては集落形成しなかった標高 640m の山上や高冷地でも集落を形成の痕跡がみられる。この点は佐久盆地と同様である。前述のように上田盆地では東海・北陸・畿内系土器のなど外来系土器が多く出土し、これらの外来系土器とともに外来系の集団や新たな土木開発技術が上田地域にもたらされた可能性は高い。沖積地だけにとどまらない古墳時代前期における上田地域の居住域の拡大も、新たな開発技術の導入がその背後に存在したことが推察されるのである。

佐久盆地では後期集落の集住大規模集落の形成傾向から、古墳前期に至ったとたんに一挙に散住へと向かうが、上田盆地においては集住から散住の図式は当てはまらないことが判明した。

## （2）長野盆地南部（塩崎・篠ノ井・横田・屋代・栗佐遺跡群）

私は佐久・上田に比べより巨大な遺跡を有する長野盆地の集落を分析する段階に至っていない。そこで長野盆地南部の大きな自然堤防上に営まれた千曲川左岸の長野市篠ノ井の塩崎・篠ノ井・横田遺跡群、右岸の千曲市屋代・栗佐遺跡群を選択して佐久盆地と比較してみる。選択の理由として、この一帯は古墳前期において川柳將軍塚・森將軍塚古墳など堅穴式石室を持つ 100m 級の定型化した前方後円墳が築かれた地域であり、こういった古墳が築かれなかった佐久地域とは対象を成す遺跡の分布状況を示す可能性が高いと考えるからである。

本稿では、長野盆地南部の土器編年については、弥生時代後期、古墳時代前期ともに青木一男がまとめたもの<sup>(13) (14)</sup>を用いる。青木の編年と本論で示した編年の併行関係については表 1 に示している。

また、長野盆地南部編年と佐久盆地編年の混同を避けるため、この節に限って、長野盆地の弥生後期編年は「長野 1 段階」「長野 2 段階」「長野 3 段階」「長野 4 段階」「長野 5 段階」「長野 6 段階」、佐久盆地は「佐久Ⅰ期」「佐久Ⅱ期」「佐久Ⅲ期古」「佐久Ⅲ期新」「佐久Ⅳ期古」「佐久Ⅳ期新」と表記する。

また、古墳時代前期について長野盆地は「北平 4 期」「北平 5 期」「北平 6 期」、佐久盆地は「佐久Ⅰ期」「佐久Ⅱ期」「佐久Ⅲ期」とする。

### ①千曲川左岸

塩崎・篠ノ井・横田遺跡群は千曲川左岸沿い弧を描くように発達した幅 500m 内外、全長 5.5 km に及ぶ自然堤防にある。この自然堤防を聖川と岡田川が刻んでいるため、西から塩崎・篠ノ井・横田という遺跡名となっている。3 遺跡群の北西側背後には石川条里遺跡をはじめ後背湿地が発達し、豊かな水田面が形成される。さらに北西側の山上には、前方後円墳姫塚古墳や前方後円墳川柳將軍塚古墳が築造されている（図 11 の上参照）。以下、それぞれの遺跡群を概観する。

#### 塩崎遺跡群

篠ノ井遺跡群に比べて調査事例・面積が少ない状況にあるが、中期中葉～後葉や後期前葉の遺構・遺物が多い傾向は見取れる。

#### 北部

遺跡群で最北の調査地区にあたる、市道角間線地点（図 10 中①）（以下「角間地点」という）では弥生時代後期後半（長野 4 段階≡佐久Ⅲ期新）の堅穴住居址が少数見つかっているが居住域の範囲は計れ



る状況にない。

塩崎小学校地点（図10中②）においては3次にわたる調査が行われ、弥生中期後半（栗林1式・栗林2式新）・後期前半（長野1段階≒佐久I期）と古墳前期（北平4期≒佐久I期）の竪穴住居址の存在が確認されている。

## 南部

遺跡群南部中央を南北に縦貫する市道松節小田井神社地点遺跡（図10中③）（以下「松節地点」という）では、調査区の北半部から弥生時代中期中葉（松節段階）の木棺墓群と竪穴住居址群がセットにな

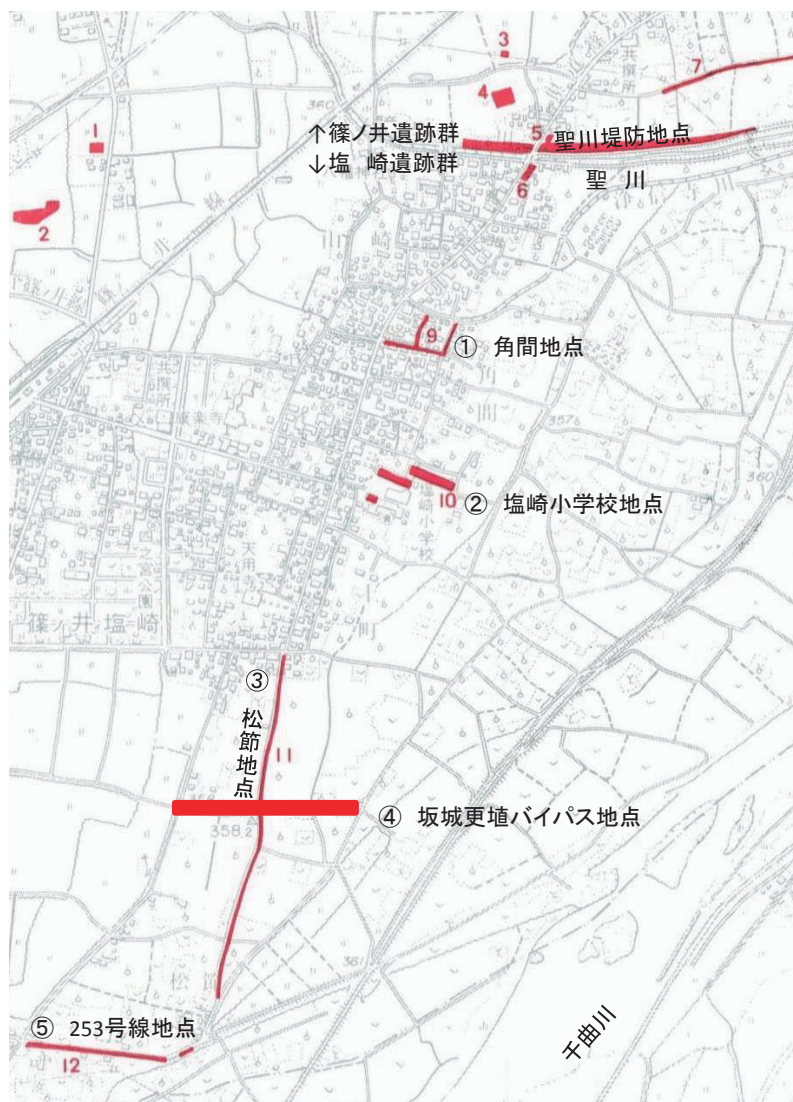


図10 篠ノ井遺跡群概略図

長野市教育委員会『塩崎遺跡群(6)―塩崎遺跡群市道篠ノ井南253号線地点―』より転載 一部加筆

るエリアが5箇所で見ついているほか、後期前半（長野2段階≒佐久Ⅱ期）と後期後半の竪穴住居址が散在している。調査区の南半部では後期後半（長野3～5段階あたりか）の竪穴住居址が激しく切り合っている。

現在、県センターで調査を進めている坂城更埴バイパス地点（図10中④）は松節地点の中部と直交する。詳細不明ながら、弥生後期後半の竪穴住居址同士の激しい切り合いが看取できる。この2つの発掘調査の成果から、塩崎遺跡群の一角（松節地点③の南半部と坂城更埴バイパス地点④一帯）には、弥生時代後期後半の大きな居住域が存在していることが推察される。また、後期後半の居住域と重なるように古墳前期（北平6期≒佐久Ⅲ期）の竪穴住居址もまとめて発見されており、そのうちの1軒からは内行花文鏡が見ついている。

遺跡群の南端市道篠ノ井南253号線地点（図10中⑤）（以下「253号線地点」という）では、弥生後期中葉（長野3段階≒佐久Ⅲ期古）の竪穴住居址がまとめて見ついているほか、古墳前期（北平4・5期≒佐久Ⅰ・Ⅱ期）の方形周溝墓も発見されている。

以上のように塩崎遺跡群では、弥生後期中葉（長野3段階≒佐久Ⅲ期古）には遺跡群南端の253号線地点⑤、これに続くは弥生後期後半（長野4～6段階≒佐久Ⅲ期新～Ⅳ期新）には松節地点③の中～南部と坂城更埴バイパス地点④一帯、古墳前期（北平4期≒佐久Ⅲ期）には松節地点③の南部周辺で相当規模の集落が営まれていたと考えられる。塩崎遺跡群では古墳前期（北平4・5期）のまとまった居住域が確認されていないが、253号線地点⑤では当該期の方形周溝墓が確認されているため、近在に相当規模の集落の存在が予想される。

このように塩崎遺跡群の調査状況からは、弥生時代後期後半～古墳時代前期において集落規模が衰退していったと考えることはできない。

### 篠ノ井遺跡群

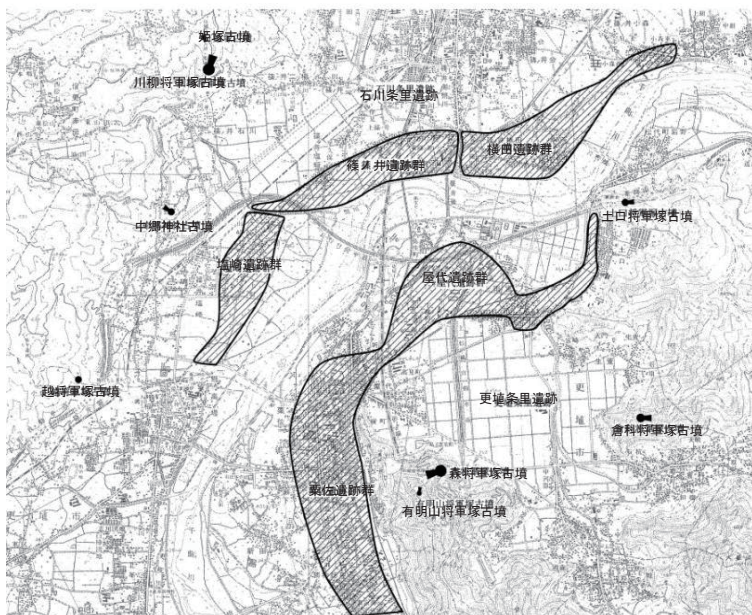
道路及び新幹線工事や堤防工事などに伴い、遺跡群の縦横にトレンチのメスが入り、その概要が明らかになってきている。

遺跡群北端中央から南部にかけては長野上田線塩崎バイパス（以下「塩崎バイパス地点」という。図11中⑨⑩）が総延長約7kmにわたって建設され、⑨と直交するよう長野新幹線（以下「新幹線地点」という。図11中⑦）建設されている。

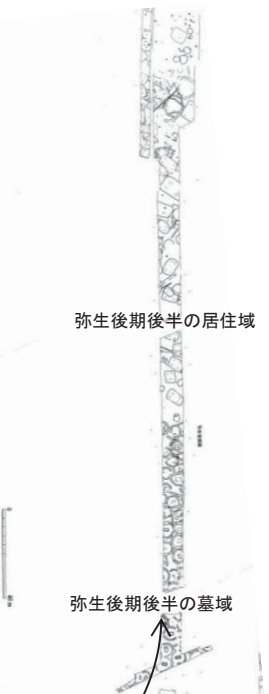
遺跡群を長さ240m、幅9m内外で南北に貫く新幹線地点では、北半で弥生後期（長野3～6段階≒佐久Ⅲ期古～Ⅳ期新）と古墳前期（北平4～6期≒佐久Ⅰ期～Ⅲ期）の竪穴住居からなる居住域、南半で（長野3～6段階≒佐久Ⅲ期古～Ⅳ期新）の墳丘規模5m内外の小型円形周溝墓群がみつかり、新幹線地点に接する塩崎バイパスⅣ～Ⅷ区でも同じ時期の竪穴住居址群の存在が確認されたことから、調査居住域・墓域ともに東西にも約240mの幅で大きく展開することが判明している（図11中⑦）。

新幹線地点周辺の集落から西側に120mほどの間隔をあけた塩崎バイパスⅩ～ⅩⅢ区や自然堤防南端にあたるA～C区では弥生後期（長野2～4段階≒佐久Ⅱ～Ⅲ期新）と古墳前期（北平5～6期≒佐久Ⅱ～Ⅲ期）の竪穴住居及び方形墳群が見ついている（図11中⑩）。A～C区と東に接する自然堤防南端を走る大規模自転車道地点遺跡（以下「自転車道地点」という。図11中①）でも弥生後期（長野2～6段階≒佐久Ⅱ～Ⅳ期新）の竪穴住居が見つかり、自然堤防上にのる遺跡群の中で、南部中央には後期前半（長野2段階≒佐久Ⅱ期）などの後期でもやや古い時期の竪穴住居が存在することが垣間





塩崎・篠ノ井・横田・屋代・栗佐遺跡群の位置



⑦ 北陸新幹線調査地点



篠ノ井遺跡群の調査地点

● 内は弥生後期～古墳前期の居住域及び墓域の存在が想定される範囲



⑤ 聖川堤防地点

図 11 篠ノ井遺跡群概略図

長野市教育委員会『篠ノ井遺跡群(6)』

長野県埋蔵文化財センター『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書4 篠ノ井遺跡群』より転載 一部加筆



見える。

遺跡群南部の中央自動車道長野線地点（以下「高速道地点」という。図 11 中⑥）では、後期後半（長野 4 段階≡佐久Ⅲ期新）になると集落の営みが始まり、後期後半でも末（長野 5・6 段階≡佐久Ⅳ期古新）になると推定 200m × 140 m の楕円形環濠が掘削され、環濠内外に多くの竪穴住居が建造されて集落が大規模化する。調査区内では特に長野 5 段階の竪穴住居址の検出数が多い。その後、当地点においては古墳前期前葉（北平 4 期≡佐久Ⅰ期）が空白となり、古墳前期中葉（北平 5 期≡佐久Ⅱ期）に集落の営みが復活、環濠も拡大される。古墳前期後葉（北平 6 期≡佐久Ⅲ期）も集落の営みは継続されるが、この時期に環濠は埋没したようだ。

高速道地点の南に位置する自然堤防南端の聖川堤防地点（図 11 中⑤）では、弥生後期（長野 5 段階≡佐久Ⅳ期新）～古墳前期（北平 5 期≡佐久Ⅱ期）まで方形周溝墓群（円形周溝墓含む）が見つかった。墳丘長 15m ～ 20m に及ぶ前方後方形周溝墓群も 5 基検出されており、やはり弥生時代後期後半～古墳時代前期までの時間幅を持つ。

以上、篠ノ井遺跡群の弥生後期集落は、長野盆地南部の編年では後期 2 段階に始まり、3・4・5・6 段階と順を追って拡大する傾向が看取される。そしてこれ以降、古墳前期（北平 4 期～6 期）にかけても後退することなく、集落が継続するとともに大きな規模の墓の造営も開始される。

#### 横田遺跡群

前遺跡に比べて調査履歴が少なく全体像は不明確だが、遺跡群南端よりも中央部付近に弥生後期、古墳前期集落の存在が予想されている。調査者によれば、生産域の制約から塩崎・篠ノ井遺跡群よりも規模の小さい集落であろうことが推測されているが、弥生・古墳時代のいずれの時期であるか詳細は不明である。

#### ②千曲川右岸

千曲川は、長野盆地に入って大きく流れを変え、東に屈曲する。右岸沿いには全長 5.3km、最大幅 800m の自然堤防が発達し、この上に縄文時代中期初頭から生活の痕跡が残る屋代・栗佐遺跡群がある。その背後（東側）には広大な後背湿地が発達し、平安時代の更埴条里水田遺跡が広がっている。

更埴条里水田を望む周辺の山上には、森將軍塚をはじめ、倉科將軍塚・有明山將軍塚・土口將軍塚古墳など古墳時代前～中期 4～5 世紀の大型前方後円墳が造営されている。

#### 屋代遺跡群

古墳時代前期は下条・灰塚、城ノ内遺跡などの学史に名を留める遺跡があり、最近では長野新幹線（以下、「新幹線地点」という）、上信越自動車道（以下「高速道地点」という）や土口バイパス（以下「バイパス地点」という）建設工事などで大規模なトレンチが入ってその内容が徐々に明らかになりつつある遺跡群である。

高速道地点は遺跡群中央を南北に縦断するように幅 70m 内外、長さ 700m が調査された。弥生後期後葉（長野 6 段階≡佐久Ⅳ期古）併行に小規模集落の形成が始まり、古墳前期（北平 4～6 期≡佐久Ⅰ期～Ⅲ期）さらには古墳中期まで継続して竪穴住居を主体とする集落が営まれていた。調査区外の東西に集落の広がりが推測される（図 12 中 6 周辺）。また、集落址から南へ 560 m 離れた場所には、古墳前

図 12 屋代遺跡群概略図

(更埴市教育委員会『屋代遺跡群』 長野県埋蔵文化財センター『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 更埴条里遺跡・屋代遺跡群-更埴市内その4-』より転載 一部加筆)



期（北平 6 期≡佐久Ⅲ期）に千曲川上流から引水するために掘削されたと考えられる基幹水路（図 12 中 SD258）が東西方向に走っている。集落址と基幹水路の間には古墳中期の水田址が発見されており、基幹水路の整備以降、屋代遺跡群南部には大規模な水田が開かれていったことがわかっている。

バイパス地点は、幅 15m 内外、東西長 250m にわたって横長の遺跡群中央を横断する形で実施された。高速道地点とは直交している。高速道を境に東側は更埴市教委（図 12 中 1）、西側は県センター（図 12 中 5 の下部）によって発掘され、市教委調査区から弥生時代後期後半から古墳時代前期の居住域がみつかった。弥生後期後葉（長野 6 段階≡佐久Ⅳ期古）から古墳前期（北平 4～6 期≡佐久Ⅰ～Ⅲ期）までに併行すると考えられる竪穴住居址 50 軒あり、その内訳は、弥生後期後葉（青木 6 段階）～古墳前期（北平 4 期）が 31 軒、古墳前期（北平 5 期）が 16 軒、古墳前期（北平 6 期）が 3 軒である。古墳前期（北平 5 期）の灰塚遺跡（図 12 中 8）もこの調査地区に接し、バイパス地点（市教委）と一体の遺跡である。この一帯はⅢ期以外については南北に相当な広がりを持つ集落である可能性が高い。

上記の高速道、バイパス地点では古墳時代中期の竪穴住居址が少なかったが、高速道西側に位置する城ノ内・大境遺跡（図 12 中 2・5）では古墳中期の大きな集落が営まれていたことがわかっており、古墳中期には居住域の主体が西側へ移動した状況が把握できる。

また、遺跡群西部を南北に貫く長野新幹線地点（図 12 中 7）では古墳前期（北平 4 期）小集落と古墳中期後半のまとまった集落址が発見されている。

このように屋代遺跡群における居住域としての土地利用は、弥生後期末を起点として古墳時代前期に活況を呈し、その後も地点を移動しながら土口將軍塚、倉科將軍塚、有明山將軍塚など古墳時代中期の前方後円墳が造営された時期にまで大きな居住域が維持されていたことがわかるのである。

## 栗佐遺跡群

屋代遺跡群の南に細長く展開する栗佐遺跡群は、現在の市街地化が進んだ地域であるため、面的に把握できるような大きな発掘調査事例に乏しく、概要の把握は困難である。しかし、五輪堂遺跡をはじめ戸崎・南沖遺跡など試掘・立ち合いを含めた調査の積み重ねによって、屋代遺跡群と同様弥生時代後期末から古墳時代前～中期の集落遺跡が展開した可能性が高いことが解っている。

これまでの調査状況から屋代・栗佐遺跡群では、弥生後期後葉から古墳前期にかけて居住域としての利用が活発になるのに対し、その前の時期弥生時代後期前葉～中葉（長野 1・2・3・4 段階≡佐久Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期古新）の遺跡はほとんどないことがわかってきた。弥生時代前半の屋代遺跡群の周辺の状況も見ておく。

## なまに 生仁遺跡

五十里川を挟んで屋代遺跡群東部の南側にあり、南から北へ向かって流れる沢山川沿いの細長い微高地上に占地する。昭和 46 年の遺跡南部の発掘調査では、弥生後期後半（長野 4～5 段階≡佐久Ⅲ期新～Ⅳ期古）～古墳前期（北平 4・5 期≡佐久Ⅰ～Ⅱ期）、を中心とする竪穴住居址が密集して検出された。遺構は確認されなかったが、弥生中期中葉（栗林Ⅰ式）の遺物も確認された。北側の第 3 次調査では、古墳前期（北平 4・5 期≡佐久Ⅰ～Ⅱ期）の竪穴住居址が確認された。また、平成 15・16 年度実施の 6 次調査では、栗林期末か吉田式初頭（長野 1 段階）の土器群が見つかった。



以上の調査により、生仁遺跡は弥生時代中期末～後期初頭と後期後半（青木4段階）以降、居住域として利用された遺跡であり、屋代・栗佐遺跡群に先行して開発された遺跡であることが見えてきた。

そとにしがわら

#### 外西川原遺跡

千曲川右岸の塩崎遺跡群の3.5km南側にある。調査されたのは2000㎡であるが、弥生時代後期の居住域は東西200m、南北150mに及ぶ。8軒検出された竪穴住居址の出土土器は、弥生後期後半（長野4・5段階＝佐久Ⅲ期新・Ⅳ期古）に相当するものと考えられる。

大規模な自然堤防上にある屋代・栗佐両遺跡群は、弥生後期（長野6段階＝佐久Ⅳ期新）を起点として、古墳時代前～中期にかけて居住域としての利用が盛んになる状況が把握された。弥生後期前葉～中葉（長野1・2・3・4段階＝佐久Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期）にかけては、居住域としての利用が皆無に近い状況で塩崎・篠ノ井遺跡群とは異なる状況を示している。なお、弥生後期中葉（長野3・4期＝佐久Ⅲ期）にかけては、屋代・栗佐遺跡群周辺部の生仁・外西川原遺跡で、居住域の形成が始まっている。弥生後期前半の屋代・栗佐遺跡群では、何らかの理由により居住域の形成が回避されていた可能性が高い。

### ③佐久盆地との比較

千曲川が流路を大きく東に変えて左右両岸に大規模な自然堤防が形成される地形上についての塩崎・篠ノ井・横田・屋代・栗佐遺跡群の弥生時代後期後半～古墳時代前期の遺跡の動態を概観した。

その結果、塩崎・篠ノ井遺跡群では後期前葉（長野2段階＝佐久Ⅱ期）には集落の形成が再開し、以降後期中葉（長野3・4段階＝佐久Ⅲ期）を経て後期後葉（長野5・6段階＝佐久Ⅳ期）には集落規模が大きくなり、以降古墳前期（北平6段階＝佐久Ⅲ期）さらには古墳時代中期まで遺跡群の範囲内の各所で大きな規模の集落の造営が続いていたことがわかってきた。

屋代・栗佐遺跡群では弥生後期前半の土地利用の痕跡がなく、後期中葉（長野4段階）にいたってようやく遺跡群を取り巻く生仁・外西川原遺跡などで集落が形成される。屋代・栗佐遺跡群で集落が形成され始めるのは、後期後葉（長野5～6段階）でこの時期を嚆矢として古墳時代前期は各期を通じて、さらには古墳時代中期まで、大規模な生産基盤を背景にして大きな集落が営まれ続けたようだ。

このように長野盆地南部の大型前方後円墳が形成される塩崎・篠ノ井・横田・屋代・栗佐遺跡群を分析した結果、弥生後期末に至って遺跡数が減少し、古墳時代に至って遺跡数は増加するものの集落規模が縮小し広域に分散していった佐久地域の集落とは好対照をなす状況が把握された。すなわち、遺跡群から集落が消え去ることはなかったし、継続して営まれた集落が縮小することはなく、かえって大きく成長していった過程を看取することができたのである。

## 6 鉄製品のあり方

富沢一明が行った佐久地域の弥生時代の鉄器集成<sup>(15)</sup>によると、佐久地域における弥生時代の鉄器は、中期においては多鈕無文鏡とともに出土した社宮司遺跡の板状鉄斧があり、これについては高久健二の検証により、帰属時期に矛盾がないものとされている<sup>(16)</sup>。このほかに中期の遺構から出土したとされる五里田遺跡1・2・5号住居址の鉄剣は、後期後半の円形周溝墓等からの混入品と見るべきである。また、西一本柳遺跡Ⅷ M6号溝出土の鎌、X 11・43号住居址の刀子については、その帰属時期について

慎重な検証が必要である。

弥生後期に入るとⅠ期では西一本柳遺跡ⅩⅢ 9号住居址の鉄鏃、円正坊遺跡Ⅷ 39号住居址出土の針？などがある。

Ⅱ期では久瀬添遺跡 27号住居址の棒状鉄製品、円正坊遺跡Ⅷ 28号住居址の刀子、37号住居址の鉄鏃、鉄剣などがある。Ⅰ・Ⅱ期の住居址出土鉄製品の帰属時期については、今のところ確証がない。

Ⅲ期古では周防畑遺跡群 26号住居址で鏃、52・53号住居址で刀子が出土している。

Ⅲ期新からは鉄製品の出土量が増大する。周防畑遺跡群大豆田遺跡Ⅰ・Ⅱ 1号住居址で不明鉄製品、周防畑遺跡群宮の前遺跡Ⅰ 27号住居址で鉄鏃、84号住居址で鉄鏃・軸、17号周溝墓で螺旋形鉄釧、若宮遺跡Ⅳ 3号住居址で鉄軸、上直路遺跡 2号住居址で鉄釧、後家山遺跡 4号住居址で鏃、51号住居址で剣先、52号住居址で刀子、55号住居址で鏃、65号住居址角釘で、1号木棺墓で螺旋形鉄釧、西一里塚遺跡 14号周溝墓で鉄剣、7号木棺墓で螺旋形鉄釧、9号住居址で鏃などが出土している。

Ⅳ期古では、北一本柳遺跡Ⅲ 1号住居址で鏃、3号住居址で楔、21号住居址で鏃、33号住居址で加耶産の板状鉄斧、51号住居址で剣、69号住居址で軸、Ⅳ期新では西一本柳遺跡ⅩⅢで刀子が出土している。

古墳時代前期に入ると、Ⅰ期では下小平遺跡 1・4・5号住居址と松の木遺跡Ⅲで鏃、下荒田遺跡 3号住居址で刀子、近津遺跡 5009号住居址から刀子、7004号住居址から棒が出土している。

Ⅱ期では榛名平遺跡 13号住居址で鏃、藤塚遺跡Ⅲ 3号住居址で斧、和田原遺跡 4号住居址で鏃、腰巻遺跡 5号住居址で鉄片が出土している。

以上から佐久地域で集落数・規模ともにピークを迎える弥生時代後期Ⅲ期新の時期に、円形周溝墓や木棺墓など墓への鉄剣・螺旋形鉄釧に加えてガラス玉の副葬が盛んになり、鏃・刀子などの量も増大し鉄器の保有量においてもピークを迎える状況を看取することができる。

そして、それ以降の時期は後期Ⅳ期には遺跡数の減少、古墳時代には遺跡数の増加に反比例する遺跡規模の縮小現象があるが、一定量の鉄製品を確保している状況を見て取れるのである。

## 7 墓制の概略

中期後葉＝栗林 2・3 式期の墓制はもっぱら礫床木棺墓で、北西の久保（22）・北裏・西裏（18）遺跡などで確認されている。

方形周溝墓は、濃尾地方の四隅切れタイプが中期中葉には関東の相模や北陸に波及<sup>(17)</sup>、その間もなく内陸部の北武蔵でも池上・小敷田遺跡などで四隅切れの方形周溝墓が確認される。更に内陸の上毛野では遅くとも栗林期には四隅切れの方形周溝墓が高崎城遺跡などで確認され、信濃では弥生時代後期（小山Ⅰ期）に至ってようやく濃尾地方に端を発すると考えられる四隅切れの方形周溝墓が西一本柳遺跡Ⅹ（21）で造営される。

その後このタイプの方形周溝墓は、佐久地域にあっては信濃の千曲川流域から上毛野の利根川以西の弥生時代後期に特徴的にみられる小型円形周溝墓と共存して墓域を形成していることが、周防畑遺跡群宮の前遺跡（29-3）・円正坊遺跡（30-3）などで確認されている。その時期は弥生後期後半＝小山Ⅲ期新である。

後期のⅣ期の墓制は今のところ資料不足であるが、北一本柳遺跡（33）の環濠外の南側から円形周

溝墓群の一端が見つかり、前代とさして変わらない墓制であったことがうかがえる。

佐久地域で一辺 20m 前後の規模を持つ、大きな規模の方形周溝墓が造営されるのは、古墳時代前期に入ってからである。

## 8 まとめ

### (1) 低地から台地へ 弥生前期～中期の集落

濃尾地方に見られた中期Ⅳ期における低段丘上への集落進出を、石黒立人は新たな開拓技術の開発の結果とみた<sup>(18)</sup>。

沖積低地の開拓を専らとした濃尾地方の中期Ⅲ以前の状況は、これに併行する関東地方の東京湾東岸の千葉県常与遺跡や、相模湾岸の神奈川県中里遺跡、北武蔵の埼玉県妻沼低地に位置する池上・小敷田遺跡など関東において初期の本格的な水田耕作を目指して開拓された諸集落の立地状況と共通する。こうした関東諸地域の遺跡立地が、濃尾の中期Ⅳに併行する時期になると東京湾東西沿岸地域では濃尾地方に連動するように台地上の開拓に転換していく。北武蔵ではこの転換がやや遅れ、前中西遺跡の立地に象徴されるように中期Ⅳ併行の時期までは沖積低地に集落を構え、櫛引台地など高台への集落及び耕作地の進出は後期まで持ち越される。

巨視的にみると以上のように概括されるが、これらの立地状況の転換の理由はそれぞれの地域の実情も踏まえて判断されなければならない。濃尾地方では中期Ⅳ以降も低地の集落が引き続き営まれて、高所の遺跡と併存する。これに対し、関東諸地域では中期Ⅳ以降低地への集落造営は停止されるわけである。濃尾平野では中期Ⅲの時期に低地では人口飽和状態を迎えた結果、新たな高所への集落進出を行い、関東諸地域では、洪水の多発などの被災を避けて、高台への集落を果たしたと見ることもできる。

では、信濃千曲川流域の状況はどうか。長野盆地南部では弥生時代前期～中期前葉～中葉、中期中葉～後葉（栗林期）・後期前葉（吉田期）・中葉～後葉（箱清水期）を通じて、千曲川沿いの自然堤防に集落が立地し続ける。自然堤防の後背湿地は、豊かな生産が保障される水田を有しており、栗林期には、基幹水路の確立が想定されるなど生産域を飛躍的に拡大させる土木工事が行われた可能性が指摘されている<sup>(19)</sup>。

佐久盆地では弥生前期～中期中葉にかけては、千曲川の沖積地か湯川の第1段丘など氾濫の危険度が高い低地に遺跡が立地する。これに対し栗林式土器が成立する中期中葉～後葉にかけては、遺跡が沖積地から台地上や丘陵上に上がる傾向が顕著となる。東京湾東西沿岸地域の宮の台式土器の集落と同様の遺跡の立地状況を示す。

佐久盆地の栗林期の集落は、中期中葉の栗林1式期新段階において小規模で点的な分布しか示さず、中期後葉栗林2式古段階では湯川と志賀川沿いの2か所に居を移して中規模化し、栗林2式新段階では千曲川の支流湯川沿いで大規模集住集落群を形成する。そして、中期末の栗林3式ではこの大規模集住集落が一挙に拡散の方向へ動き、湯川から北側の田切り末端部でごく小さな集落しかみられなくなる。

現状では以上のような変遷が辿れるのであるが、最近群馬県高田川流域の安中市二軒在家原田頭遺跡で栗林1式古段階の集落が発見された。今後、安中市と至近距離にある佐久盆地で栗林1式古段階の集落が発見される可能性は高い。



## (2) 後期Ⅲ期新における繁栄 弥生時代後期の集落

後期になるとⅠ期で佐久盆地北部の湯川沿いに復活した集落が、後期Ⅱ期になると田切り末端部や佐久盆地南東部、南西部など佐久盆地各所で集落を営み始める。Ⅲ期古の実態は今のところ周防畑遺跡群・円正坊遺跡群・西一里塚遺跡群で確認されている程度で広がり不明確であるが、Ⅲ期新に至ると佐久盆地北部では居住域の主体は田切り末端部となり、南東部、南西部でも続々と大きな集落が営まれるようになる。弥生時代を通じて佐久盆地では最も数多くの集落が営まれ、佐久盆地の各所で活発な開発が行われた時期と評価できる。

Ⅳ期に至ると佐久盆地北部では、田切り末端部から再び湯川沿いに拠点を移動し、北一本柳・西一本柳遺跡で環濠集落が営まれる。このほか、北部で当該期の集落は西一里塚遺跡で北一本柳・西一本柳遺跡に比べると一回り小さな規模の円正坊遺跡や小規模な西近津遺跡で発見されている程度である。

また、盆地南東部では環濠で囲われる戸坂遺跡（38）、佐久盆地南西部では榛名平遺跡（44）でいずれも一か所しか当該期の集落が発見されているに過ぎない。集落が佐久盆地全域に広がり、大きな規模の集落が多かったⅢ期新に比すると、Ⅳ期の集落は佐久盆地北部では湯川沿いの西一本柳・北一本柳遺跡、西一里塚遺跡、南東部は戸坂遺跡、南西部は榛名平遺跡に収斂されていったかのような状況が看取できるのである。

続く、古墳時代前期に至ると弥生後期集落が収斂されたかのような状況は一変し、核分裂を起こしたように一挙に佐久盆地北部地域に拡散する。弥生時代における集住指向から、散住への方向転換が見て取れる。前述のとおり古墳前期Ⅰ期においては、佐久盆地北部、Ⅱ期においては南部に偏在する傾向があり、いずれも長期継続はしない。

集落の短命傾向は今まで述べてきた佐久盆地の弥生時代遺跡全体にも当てはまる。前期～中期前葉の遺跡は小規模でおおむね1時期で終焉を迎えている。中期後葉の遺跡は、一つの遺跡における集住化ではマックスに達する時期で巨大な集落が形成される時期であるが、いずれも土器型式で言うと1～2時期で終焉を迎えている。後期に至ると大規模集落は2時期程度、多くても3時期で途絶える場合が多く、小規模集落はそのほとんどが1時期で途絶えている。その中で、例外は、円正坊遺跡（30-3）で後期のすべての時期を網羅し、さらに古墳時代Ⅰ期にまで継続している。

こういった例外があるものの、佐久盆地では弥生時代～古墳時代前期を通じて農業技術の改革が随時行われていたであろうにも関わらず、長期継続する集落は少なかった。その大きな要素は灌漑技術の限界性にあったのであろう。

佐久盆地北部及び南西部を一面豊かな水田面に変えたのは中世末から江戸時代初期に行われた用水の開削であった。前述の弥生後期集落繁栄地佐久盆地北部田切り地形末端一帯を水田化したのは、湯川のはるか上流から取水した常木用水の開通であった。用水の取水口から水田域（現在西一里塚遺跡内の濁川と常木用水の交差点）までの全長約3.6kmに対し、その比高差はたったの8mしかない。これを誤りなく引水する土木技術は、弥生～古墳前期においては開発できなかったのであろう<sup>(20)</sup>。

佐久盆地では未だ弥生時代～古墳時代の水田の発見例はないのでその実相は想像にゆだねるしかないが、少なくとも広大な水田域を想定することは難しく、安藤広道が提唱する「自然微傾斜利用の灌漑型小区画水田」が各集落に接して点々と普及していたと考えられる<sup>(21)</sup>。

佐久地域では、弥生時代において各時期で最も条件の良い土地を選択できる空間が多い状況にあったと示唆しているように思えるのである。言い換えれば、佐久盆地の弥生時代中後期は濃尾平野に端を







発する開拓技術の革新はあったにせよ、終始人口飽和状態になることはなく、水田耕作可能な水源に恵まれた温暖なエリア内での移動を繰り返すにとどまっていた状態であったと考える。移動を繰り返す中で、気候条件にも恵まれ<sup>(22)</sup>生産性が向上して、人口増に伴う集落数・規模ともにピークを迎えた時期が弥生時代後期Ⅲ期新であったと考えておきたい。

そして、全国的に気候の冷涼化が指摘されている古墳時代に向かう弥生後期末にあたるⅣ期に至ると気候変動と土地の疲弊に伴う生産性の低下により、北一本柳・西一本柳遺跡、戸坂遺跡、榛名平遺跡などある程度の生産が確保される佐久盆地数か所の土地への集住の傾向が強まっていったと現状では解釈しておきたい。

ところで馬場伸一郎によれば、栗林期の土器に付着した種実痕を分析したところ、米と雑穀が半々であったという。佐久盆地北部の後期Ⅲ期新の時代に繁栄を迎えた弥生社会を支えた生産物は、米一辺倒ではなく、雑穀も取り入れられていた可能性は高い。弥生時代後期以降の種実痕分析の実施が待たれるところである。

### (3) 小規模化と広域拡散 古墳時代前期の集落

弥生後期Ⅲ期新に佐久盆地各地では大きな規模の集落が多数営まれたが、Ⅳ期では遺跡数が減少する。そして古墳前期に至るとそれまでの大きな規模の集落は営まれなくなり、10軒前後の小規模集落が多数形成された。その分布は、弥生集落の存在した場所を避けるかのように盆地平坦面から山裾の高所まで広域に拡散する特徴もあった。そしてこの時期佐久盆地で集落から隔絶した特定首長層の墳墓と考えられるのは瀧の峯墳丘墓群であるが、墳丘規模は20mに満たず小規模、主体部は木棺を収めた長方形土壌、副葬品は短剣と土器程度、いずれの要素を見ても貧弱な内容であった。

長野盆地南部で今回分析対象とした塩崎・篠ノ井・屋代遺跡群などの状況はこれと異なり、青木一男が述べた<sup>(23)</sup>ように弥生Ⅲ期よりもむしろⅣ期（青木5・6段階）に遺跡群は規模を減じることはなく、遺跡群内での移動を繰り返しながら、集落規模はむしろ大きくなる傾向が看取された。そして、これに継続して古墳時代前中期でも大きな規模の集落を維持していた可能性が高い。これに加えて、新幹線地点に見られた弥生後期Ⅳ期における円形周溝墓群の大規模な群集、聖川堤防地点の前方後方形周溝墓の群集などは、いずれも佐久盆地では見られない現象であった。

長野盆地南部の千曲川支流の3地域における古墳・墳丘墓、集落のありかたを分析した青木一男は、森・倉科・土口・有明山将軍塚を築造する沢山川流域、媛塚・川柳将軍塚古墳を築造した聖川流域、和田東山古墳群を築造する赤野田川流域など前方後円墳を山上に築造する地域と、両者の間に位置する北平1号墳のような木棺で墳長12m程度の小規模墳丘墓を山上に築造する蛭川流域を比較すると眼下の平坦部での集落規模に格段の差があることを指摘している<sup>(24)</sup>。蛭川流域には、弥生後期～古墳前期の遺跡として、松原・屋地・中条遺跡などがあるが、松原遺跡は青木4段階に集落を形成したのち、しばらくの断絶の後古墳前期Ⅱ～Ⅲ期に小集落を形成するにとどまる。中条・屋地遺跡では、青木1段階～古墳Ⅰ期の小集落があるが、古墳Ⅱ～Ⅲ期の集落はない。

塩崎・篠ノ井・屋代遺跡群において推察された弥生後期後半から古墳時代前期に継続する集落の発展、これに連動する集落に接した大規模な大型墓からなる墓域の形成は、屋代遺跡群で確認されたような千曲川上流から引水する大規模な基幹水路の掘削に伴う広大な水田＝生産域の存在に支えられていたと考えて大過ないと思われる。古墳前期における基幹水路は、自然流路の整備改修を始め前代に比べると格

段に進歩した水路網を整備した栗林期の水路よりもさらに進歩し、新たな技術や先進器具をもつフロンティアの指導のもと多くの労働者の手を煩わせて作りだされたものであった。そしてこの地域における大規模な生産域の出現は、森・川柳をはじめとする古墳時代前期の 100m 級で竪穴式石室を有し、鏡をはじめとする豊富な副葬品を有する長野県代々の前方後円墳群の成立をも惹起した。

では、佐久盆地での前方後円墳未築造と長野盆地での前方後円墳築造という違いが生じる要因は何であったのだろうか。本稿では以下の 3 点を考えた。

### ①基幹水路の未開削

佐久盆地の弥生後期Ⅲ期新に大きな集落が犇めき合うように林立した北部地域は、活火山浅間山の噴火に起因する火山灰質の地質であるため水流に弱い地盤である。このため、田切り地形の形成に象徴されるように湯川など多くの河川は谷が深く刻まれ、河床から台地面までの比高差が大きい。用水を開削する際には、取水口は河床からの比高差が小さい場所を選択する必要がある、水田を開拓した低地からはかなり離れた場所に取水口を求めなければならなかった。前述のように佐久盆地北部の弥生後期Ⅲ期新の集落密集地が取り巻く岩村田・長土呂一帯の広大な低地に常木用水が開通し、湯川からの引水が果たされたのは江戸時代初期のことであった。佐久地域北部では、古墳時代人の新技術をもってしても基幹水路を開通できなかったのである。

地形的な要因によって基幹路たる用水開発できなかったことが、佐久地域において古墳時代前期において新たな水路開発技術を受容しながらも、更なる発展に至らなかった理由の一つであった。

一方、長野盆地の塩崎・篠ノ井・屋代遺跡群一帯では、屋代遺跡群で発見された基幹水路（S D 258）の存在に象徴されるように千曲川上流からの引水に成功したことが、古墳時代に入ってからからの発展の原動力になったと考えられるのである。

### ②地力の差

前述のように佐久盆地北部の土地は火山灰質であり、河床が深くにあるため洪水に覆われることも少ない。一方、長野盆地の塩崎・篠ノ井・屋代遺跡群は自然堤防上にあり、何回にもわたって洪水砂に覆われている。両地域には土地の肥え方に決定的な違いがあった。弥生時代後期後半には両地域ともに一定の範囲内で、集落の移動を繰り返しており、これに伴って生産域の移動も行っていたと考えられる。移動を繰り返す知恵によって生産性を保つことができたのが洪水による肥沃な土地を有した長野盆地の集落であり、多くの土地が疲弊してしまった結果、生産性を維持し切れなくなったのがもともと肥沃とは言えない火山灰質の土地に水田を開いた佐久盆地の集落であったと推察されるのである。

### ③気候変動に伴う標高差

古墳時代前期は、気候が冷涼化したと言われている<sup>(25)</sup>。これが正しければ、標高 700m 内外の佐久盆地では古墳時代生産域と集落の形成に当たって大きなハンディキャップを背負っていた可能性が考えられる。気候の冷涼化が前述の地力の低下に伴う佐久盆地の生産性に低下に追い打ちをかけ、農業にダメージを与えたのではないか。その影響は、標高 350m 内外の長野盆地よりも多大なものがあったと考えられる。両地域の標高差は、現代の農業においても顕著な違いを見せる。長野盆地は二毛作をもちぱらとするのに対し、佐久盆地では二毛作は不可能である。

以上、佐久盆地と長野盆地の間には、前方後円墳築造の有無を決する地形的な要因、地力の差、気候の差があったことを指摘した。

次に佐久盆地とは上信越国立公園を隔てて東隣の群馬県の状況とも比較しておきたい。

群馬県は、弥生時代までは悪水処理できずに開田できなかった高崎・前橋市域の平野部を、古墳時代前期に入植した集団が新しい灌漑技術をもって水田化していった結果、畿内地方に次ぐ前方後円墳・前方後方墳の造営地となっていた<sup>(26)</sup>。その発展過程を小島敦子<sup>(27)</sup>が端的にまとめているのでその概略を以下に記しておく。

「群馬県の地形は中央から南東部は平地が広がり、その周囲には山や丘陵が取り囲んでいる。この平地は弥生時代後期までは未開地で、本格的な開発が開始されたのは古墳時代前期に入ってからであった。

浅間山C軽石降下直前の古墳時代初頭は、発展性のある平野部へ集落の移動がほぼ完了していた。この段階の遺跡は平野部内の開析谷に面した場所にあり、周辺の小川や谷間の湧水を利用した効果的な灌漑がおこなわれていたことが想定されている。弥生時代の水田は谷底に限られていたが、古墳時代初頭には、高崎市日高遺跡で見られるように高所にも水路を巡らせてそれまで手を付けなかった谷周辺部へも水田を広げていったと考えられているのである。弥生時代にはなかった用水路敷設技術・高度な配水技術の導入であった。

C軽石が降下した後の古墳時代前期後半には、大型の用水路が整備され、広大な平野部・水田農耕適地での開拓が始まった。遺跡の数も爆発的に増加する。前橋市徳丸仲田遺跡では上幅3～5m、深さ1.2m、その南2kmにある玉村町砂町遺跡では同規模の古墳時代前期の溝が見つかった。両者は一つにつながる田を開くための長大な主要幹線用水路ではないかと注目されている。また幹線用水路から水田用水を引いて、水田域に配水するための堰も見つかっている。このような大規模水田開発の背景には、この時期に地域開発を主導するリーダーが登場したことを物語っており、その人物は大和王権との強い結びつきをもち、最先端の農業土木に関する情報・知識を得ていたと考えられている。」

これと同様な大規模水路の開発が、弥生時代末～古墳時代にかけて千曲川沿い自然堤防上に形成された塩崎・篠ノ井・屋代遺跡群の後背湿地で行われていたことが、前述のように屋代遺跡群の基幹水路の発見で明らかになっている。こういった新たな技術による大規模水路の開発は、前方後円墳築造地域の形成には不可欠であったことがわかる。

また、群馬県の古墳時代初頭にみられた高所にも水路をめぐらす技術は、当該期の佐久盆地の幾カ所にも営まれていた石神遺跡(65)や丸山Ⅱ遺跡(53)など山上や高所の集落にも適用されていた可能性がある。長野盆地では古墳時代前期における高所の集落の存在は、開発がそこまで及んでいない事情もあって確認できていない。しかし、長野盆地と同様に古墳時代前期に至っても集落規模を減じることがない上田地域では山間部の大日ノ木遺跡(201)・林ノ郷遺跡(202)、巴形銅器が発見された旧武石村上平遺跡(251)などで当該期の集落が発見されている状況から鑑みると古墳時代前期の長野盆地周辺においても高所の開発は行われていた蓋然性が高い。

最後に佐久・長野両盆地などの小地域ごとの古墳時代前期の集落あり方を比較してみた結果、弥生後期末～古墳時代前期にかけて集落規模を拡大していった上田盆地では、特定首長層が大きく成長していたと考えられる。浦野川流域などの山上に未発見の有力古墳が存在している可能性があることを指摘しておく。



20 年ほど前に「素描 弥生社会解体に伴う集落の拡散」を題する研究ノートを提出し、弥生後期と古墳前期の集落規模や分布の違いを指摘したことがある<sup>(28)</sup>。その際には古墳前期集落の数と小規模化、広域拡散傾向を指摘し、その要因については気象・地力などの内的要因と前方後円墳築造地域への労働力の供出という外的要因の両面を推定した。

発掘資料が増加した今回の分析結果では、集落は小規模化するものの、数はむしろ増加して広域に拡散していると訂正するに至った。その要因については、内的な条件として地形・地質的な条件による用水技術の採否を付け加えることができた。

古墳時代前期の佐久地域における集落規模の縮小を人口減少ととらえた旧論では、歴史的モニュメント前方後円墳築造のために佐久盆地から長野盆地へ労働力が流出した可能性を考えた。しかし、佐久地域の広い範囲で小規模ながら古墳時代前期の集落が発見され続けている散住という状況や瀧の峯2号墳にみる共同墓地を離れた特定集団の上位階層墓の出現という状況を鑑みれば、必ずしも佐久地域全体の人口が減少したとは断じきれない状況となってきた。佐久地域の古墳時代前期集落の動態を長野盆地の政治的な動向と短絡的に関連付けるのは、時期尚早と言わざるを得なくなった。

先日、森將軍塚古墳を整備した矢島宏雄氏から「今後、長野県全域の弥生後期～古墳時代前期の遺跡分布状況を分析せよ。」と指示を受けた。長野県の弥生～古墳社会解明のためには有効手段と考える。重い課題であるが、少しずつ資料を集積して期待に応えていきたいと考える。(2015.3.22 稿了)

本稿は家族の支えによって草することができた。図面作成は、森泉智也氏の手を煩わせた。

お世話になった方々に多謝(順不同 敬称略)。五十嵐幹雄、大木紳一郎、石川日出志、児玉卓文、堤 隆、小林眞寿、尾見智志、富沢一明、森泉かよ子、矢島宏雄、翠川泰弘、寺島孝典、平林大樹、千野 浩、廣瀬昭弘、青木一男、須藤隆司、馬場伸一郎。

#### 註

- (1) 中部高地型櫛描文土器については 青木一男 1998 「第3章 遺物各節 第1節 弥生時代後期 77-78p」 「第4章 成果と課題 第1節 中部高地型櫛描文系土器群の理解 197 p」 『松原遺跡』 弥生・総論 6 弥生後期・古墳前期 に詳述されている。
- (2) 小山 岳夫 c 2014 「西一本柳遺跡一帯の弥生後期集落の変遷」 『長野県考古学会誌』 149
- (3) 柳澤 亮他 2006 「(12) 西近津遺跡群」 『長野県埋蔵文化財センター年報 23』 長野県埋蔵文化財センター  
柳澤 亮他 2007 「(6) 西近津遺跡群」 『長野県埋蔵文化財センター年報 24』 長野県埋蔵文化財センター  
柳澤 亮他 2008 「(5) 西近津遺跡群」 『長野県埋蔵文化財センター年報 25』 長野県埋蔵文化財センター  
2015 年 3 月に正式広告書の刊行が予定されている。
- (4) 中沢道彦 2015 「長野県域における縄文時代の終末と生業変化 2015.1 現在の編年表」 『シンポジウム ハケ岳山麓における縄文時代の終末と生業変化』 明治大学日本先史文化研究所
- (5) 馬場伸一郎 2006 「佐久盆地における栗林式土器の編年と弥生中期集落」 『長野県考古学会誌』 112 号
- (6) 小林眞寿 2014 「平馬塚遺跡Ⅱ・宮浦遺跡Ⅰ」 『佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書』 第 219 集 佐久市教育委員会
- (7) 小山 岳夫 b 2014 「佐久地域後期弥生土器編年と北一本柳遺跡の年代」 『佐久考古通信 113』 佐久考古学会
- (8) 富沢一明 2008 「長野県東信地域の古墳時代前期土器要素と外来系土器について」 『専修考古学 10 号』 専修大学考古学会
- (9) 小山岳夫 1999 「佐久地方の弥生土器」 『シンポジウム長野県の弥生土器編年』 長野県考古学会弥生部会
- (10) パリノ・サーヴェイ株式会社 高橋 敦 「宮浦遺跡群他の自然科学分析」 『市道遺跡Ⅴ 平馬塚遺跡Ⅱ 北裏遺跡Ⅱ 宮浦遺跡Ⅰ 北畑遺跡Ⅲ』 佐久市埋蔵文化財調査報告書 第 219 集 133-134 p
- (11) パリノ・サーヴェイ株式会社 「西一本柳遺跡Ⅳの自然科学分析」 『岩村田遺跡群西一本柳遺跡Ⅳ・北一本柳遺跡Ⅲ・

- 東大門先遺跡Ⅱ・西八日町遺跡Ⅲ・Ⅶ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第175集 第1分冊190p
- (12) バリノ・サーヴェイ株式会社 「北一本柳遺跡Ⅲの自然科学分析」『岩村田遺跡群西一本柳遺跡XⅣ・北一本柳遺跡Ⅲ・東大門先遺跡Ⅱ・西八日町遺跡Ⅲ・Ⅶ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第175集 第1分冊200p
- (13) 青木一男 1998 「第4章第1節中部高地型櫛描文系土器群の理解 第2節古墳時代前期の土器の理解」『松原遺跡 弥生・総論6』(財)長野県埋蔵文化財センター
- (14) 青木一男 1996 「第2章第1節5まとめ」『大星山古墳群・北平1号墳』(財)長野県埋蔵文化財センター
- (15) 富沢一明 2014 「佐久地域における弥生時代の出土金属製品について」『佐久考古通信』113
- (16) 高久健二 2014 「朝鮮半島南部地域における板状鉄斧」『佐久考古通信』113
- (17) 石黒立人 2009 「伊勢湾」『弥生時代の考古学8 集落から読む弥生社会』同成社
- (18) 前掲注(17)
- (19) 寺内隆夫 1998 「第5章第1節 弥生時代の土地利用」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 -更埴市内その4-更埴条里遺跡・屋代遺跡群』長野県埋蔵文化財センター
- (20) 市川武治 1992 「用水と新田開発」『佐久市志 歴史編(三)近世』佐久市志編集委員会
- (21) 安藤弘道 2009 「1農耕の弥生文化的特質 ①弥生農耕の特質 30-31p」『弥生時代の考古学5 食糧の獲得と生産』(「その基本的な特徴は、数%~1%前後の視認可能な自然の微傾斜面を、ほとんど造成せずに耕作面とし、地形や土壌、気象条件に応じた小区画を形成して、耕地外の湧水や小河川、井戸、溜池などから高低差を利用した給水・配水を行い、水田面の湛水を管理するもの」としている。)
- (22) 今村峯雅・松木武彦 2009 「②炭素14年の記録から見た自然環境変動」『弥生時代の考古学4 古墳時代への胎動』同成社 36p 弥生後期~古墳時代に気候が寒冷化するなかで、一時的な温暖期に当たっていた可能性が考えられる。
- (23) 青木一男 1999 「長野盆地南部の後期土器編年」『シンポジウム 長野県の弥生土器編年』長野県考古学会弥生部会 83p
- (24) 青木一男 1996 「第2章 第1節 北平1号墳の調査 5 まとめ」『上信越自動車道建設埋蔵文化財発掘調査報告書 7 -長野市内その4- 大星山古墳群・北平1号墳』135p
- (25) 前掲注(22)
- (26) 若狭 徹 2007 『古墳時代の水利研究』学生社
- (27) 小島敦子 2013 「第1章 古墳時代の自然災害と遺跡 浅間山の噴火と古墳社会の形成」『自然災害と考古学』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (28) 小山岳夫 1994 「素描 弥生社会解体に伴う集落の拡散」『長野県考古学会誌』74号

## 参考文献

- 八幡一郎 1982 『南佐久郡の考古学的調査』
- 宇賀神誠二 1988 「長野県における古墳時代前期の地域動向」『長野県埋蔵文化財センター紀要2』
- 関東弥生文化研究会 埼玉弥生土器観会 2014 『考古学リーダー23 熊谷市前中西遺跡を語る-弥生時代の大規模集落-』六一書房

## 遺跡発掘調査報告書等

### 佐久地域

北佐久教育会 1956 『北佐久郡志』第2巻歴史編

### 弥生時代前期~中期前半の発掘調査報告書

- 佐久市教育委員会 2004 『東五里田遺跡』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第117集
- 佐久市教育委員会 1999 『中西の久保遺跡Ⅱ 仲田遺跡 寺畑遺跡Ⅱ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第66集
- 佐久市教育委員会 2006 『下信濃石遺跡』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第134集
- 佐久市教育委員会 2010 『岩村田遺跡群東大門先遺跡Ⅱ 西八日町遺跡Ⅲ・Ⅶ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第175集
- 佐久市教育委員会 2008 『反田遺跡』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第149集
- 佐久市教育委員会 2014 『市道遺跡Ⅴ 平馬塚遺跡Ⅱ 北裏遺跡Ⅱ 宮浦遺跡Ⅰ 北畑遺跡Ⅲ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第219集
- 佐久市教育委員会 2008 『反田遺跡』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第149集

望月町教育委員会 1989 『平石遺跡』望月町文化財調査報告書第17集

#### 弥生時代中期後半～後期の発掘調査報告書

長野県埋蔵文化財センター 2014 『中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 5 - 佐久市内5  
— 森平遺跡 寄塚遺跡群 今井西原遺跡 今井宮の前遺跡』

#### 深堀遺跡

藤沢平治 1972 「佐久市中込深堀遺跡発掘調査概報」『長野県考古学会誌』第13号

佐久市教育委員会 2002 『深堀遺跡Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第98集

佐久市教育委員会 2002 『深堀遺跡Ⅳ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第102集

佐久市教育委員会 2013 『和田上遺跡Ⅱ 馬瀬口遺跡Ⅱ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第206集

佐久市教育委員会 1998 『根乃井芝宮遺跡』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第49集

佐久市教育委員会 2001 『川原端遺跡』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第89集

佐久市教育委員会 2010 『岩村田遺跡群西一本柳遺跡ⅩⅣ・北一本柳Ⅲ・東大門先Ⅱ・西八日町Ⅲ・Ⅶ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第175集

佐久市教育委員会 2008 『北畑遺跡Ⅰ・Ⅱ 北裏遺跡Ⅰ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第155集

#### 西近津遺跡

佐久市教育委員会 1989 『森下』

柳澤亮他 2006 「(12) 西近津遺跡群」『長野県埋蔵文化財センター年報23』長野県埋蔵文化財センター

柳澤亮他 2007 「(6) 西近津遺跡群」『長野県埋蔵文化財センター年報24』長野県埋蔵文化財センター

柳澤亮他 2008 「(5) 西近津遺跡群」『長野県埋蔵文化財センター年報24』長野県埋蔵文化財センター

佐久市教育委員会 2009 『森平遺跡・北近津遺跡Ⅱ・西一里塚遺跡Ⅲ・大豆田遺跡Ⅲ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第165集

佐久市教育委員会 2013 『西近津遺跡群西近津遺跡Ⅶ・Ⅸ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第207集

佐久市教育委員会 2014 『西近津遺跡群西近津遺跡Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第208集

#### 西一里塚遺跡

長野県埋蔵文化財センター 2012 『中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 4 - 佐久市内4— 濁り遺跡。久保田遺跡・西一里塚遺跡群』

佐久市教育委員会 2010 『西一里塚遺跡群西一里塚遺跡Ⅳ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第180集

佐久市教育委員会 2011 『西一里塚遺跡群西一里塚遺跡Ⅱ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第188集

佐久市教育委員会 2014 『西一里塚遺跡群西一里塚遺跡Ⅰ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第225集

#### 周防畑遺跡群

佐久市教育委員会 2003 「第Ⅷ章周防畑遺跡群辻の前遺跡Ⅰ 第Ⅸ章周防畑遺跡群中仲田遺跡Ⅰ」『佐久駅周辺土地地区画整理事業埋蔵文化財発掘調査報告書』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第110集

佐久市教育委員会 2001 『周防畑遺跡群辻の前遺跡Ⅱ 中仲田遺跡Ⅱ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第92集

佐久市教育委員会 2012 『周防畑遺跡群若宮遺跡Ⅳ・道常遺跡・南近津遺跡Ⅲ・宮の前遺跡Ⅰ・Ⅱ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第198集

長野県埋蔵文化財センター 2014 『中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 3 - 佐久市内3— 周防畑遺跡群』

#### 長土呂遺跡群

佐久市教育委員会 1992 『国道141号線関係遺跡 長土呂遺跡群下聖端遺跡Ⅰ・Ⅱ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第9集

佐久市教育委員会 2003 「第Ⅴ章長土呂遺跡群下伯母塚遺跡Ⅰ」『佐久駅周辺土地地区画整理事業埋蔵文化財発掘調査報告書』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第110集



#### 北一本柳遺跡

- 佐久市教育委員会 2006 「北一本柳遺跡Ⅱ調査報告書」『佐久市文化財年報14』  
佐久市教育委員会 2006 『岩村田遺跡群宮の前遺跡』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第140集  
佐久市教育委員会 2008 『岩村田遺跡群北一本柳遺跡Ⅳ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第158集  
佐久市教育委員会 2010 『岩村田遺跡群西一本柳遺跡Ⅳ・北一本柳Ⅲ・東大門先Ⅱ・西八日町Ⅲ・Ⅶ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第175集

#### 西一本柳・北西の久保・五里田遺跡

- 佐久市教育委員会 1984・1987 『北西の久保遺跡Ⅰ・Ⅱ』  
佐久市教育委員会 1999 『五里田遺跡』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第74集  
佐久市教育委員会 1994 『岩村田遺跡群西一本柳遺跡Ⅰ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第34集  
佐久市教育委員会 1995 『岩村田遺跡群西一本柳遺跡Ⅱ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第37集  
佐久市教育委員会 1999 『岩村田遺跡群西一本柳遺跡Ⅲ・Ⅳ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第73集  
佐久市教育委員会 2000 「西一本柳遺跡Ⅶ調査報告書」『佐久市埋蔵文化財年報8』  
佐久市教育委員会 2001 『岩村田遺跡群西一本柳遺跡Ⅴ・Ⅵ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第91集  
佐久市教育委員会 2003 『岩村田遺跡群西一本柳遺跡Ⅷ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第109集  
佐久市教育委員会 2004 『岩村田遺跡群西一本柳遺跡Ⅸ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第113集  
佐久市教育委員会 2004 『岩村田遺跡群西一本柳遺跡ⅩⅡ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第125集  
佐久市教育委員会 2005 『岩村田遺跡群西一本柳遺跡Ⅹ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第127集  
佐久市教育委員会 2005 「西一本柳遺跡ⅩⅠ調査報告書」『佐久市文化財年報13』  
佐久市教育委員会 2006 『岩村田遺跡群西一本柳遺跡ⅩⅢ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第139集  
佐久市教育委員会 2008 『岩村田遺跡群西一本柳遺跡ⅩⅤ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第154集  
佐久市教育委員会 2008 『岩村田遺跡群西一本柳遺跡ⅩⅥ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第160集  
佐久市教育委員会 2009 『岩村田遺跡群西一本柳遺跡ⅩⅦ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第169集  
佐久市教育委員会 2010 『岩村田遺跡群西一本柳遺跡ⅩⅣ・北一本柳遺跡Ⅲ・東大門先遺跡Ⅱ・西八日町遺跡Ⅲ・Ⅶ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第175集  
佐久市教育委員会 2011 『岩村田遺跡群西一本柳遺跡ⅩⅧ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第190集  
佐久市教育委員会 2012 『岩村田遺跡群西一本柳遺跡ⅩⅩ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第199集  
佐久市教育委員会 2014 『岩村田遺跡群東一本柳遺跡Ⅱ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第218集

#### 円正坊・枇杷坂遺跡群

- 佐久市教育委員会 2003 「第Ⅵ章枇杷坂遺跡群直路遺跡ⅠⅡⅢ」『佐久駅周辺土地地区画整理事業埋蔵文化財発掘調査報告書』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第110集  
佐久市教育委員会 1996 「清水田遺跡調査報告」『佐久市埋蔵文化財文化財年報4』  
佐久市教育委員会 2003 「第Ⅶ章枇杷坂遺跡群清水田遺跡Ⅱ」『佐久駅周辺土地地区画整理事業埋蔵文化財発掘調査報告書』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第110集  
佐久市教育委員会 1997 「円正坊遺跡Ⅱ」佐久市埋蔵文化財調査報告書 第53集  
佐久市教育委員会 2002 「円正坊遺跡Ⅳ」佐久市埋蔵文化財調査報告書 第102集  
佐久市教育委員会 2007・2008 「円正坊遺跡Ⅵ調査報告書」『佐久市文化財年報15・16』  
佐久市教育委員会 2008・2009 「円正坊遺跡Ⅶ調査報告書」『佐久市文化財年報17・18』  
佐久市教育委員会 2011 「円正坊遺跡Ⅷ」佐久市埋蔵文化財調査報告書 第185集  
佐久市教育委員会 2011 「円正坊遺跡Ⅸ」佐久市埋蔵文化財調査報告書 第192集  
佐久市教育委員会 1986 『枇杷坂遺跡』  
佐久市教育委員会 1998 「上直路遺跡調査報告書」『佐久市埋蔵文化財文化財年報6』  
佐久市教育委員会 2007 「上直路遺跡Ⅱ」佐久市埋蔵文化財調査報告書 第142集  
佐久市教育委員会 2007 「上直路遺跡Ⅲ」佐久市埋蔵文化財調査報告書 第144集  
佐久市教育委員会 1992 「下聖端遺跡」『国道141号線関係遺跡』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第9集  
佐久市教育委員会 2002 「上木戸遺跡」佐久市埋蔵文化財調査報告書 第96集

- 佐久市教育委員会 2002 『柳堂遺跡』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第 85 集  
 佐久市教育委員会 1983 『舞台場』  
 佐久市教育委員会 2004 『樋村遺跡（遺構編）』  
 白田町教育委員会 1987 『勝間原遺跡』  
 佐久市教育委員会 2002 『久瀬添遺跡』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第 97 集  
 佐久市教育委員会 2004 『東久保遺跡Ⅱ 東久保古墳群 1 号墳 宮田遺跡Ⅱ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第 116 集  
 佐久市教育委員会 2004 『後家山遺跡 東久保遺跡 宮田遺跡Ⅰ・Ⅲ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第 121 集  
 佐久市教育委員会 2005 『戸坂遺跡』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第 129 集  
 佐久市教育委員会 2013 『中堰遺跡』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第 202 集

#### 古墳時代前期の報告書

- 長野県埋蔵文化財センター 1991 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 2 - 佐久市内その 2- 丸山Ⅱ 腰巻 栗毛坂 ほか』  
 長野県埋蔵文化財センター 1998 『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書 1 - 軽井沢町内・御代田町内・佐久市内・浅科村内- 県 栗毛坂 砂原 中平・田中島 ほか』  
 長野県埋蔵文化財センター 2000 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 19 - 小諸市内 3- 三子塚遺跡群 三田原遺跡群 岩下遺跡 石神遺跡群 郷土遺跡 東丸山遺跡 深沢遺跡群』  
 長野県埋蔵文化財センター 2009 『上信越自動車道佐久ジャンクション建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - 小諸市内- 中原遺跡群・野火附遺跡・野火附城跡』  
 長野県埋蔵文化財センター 2013 『中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1 - 小諸市内・佐久市内 1 - 鎌田原遺跡。近津遺跡群・和田原遺跡群』  
 御代田町教育委員会 1983 『細田遺跡』  
 御代田町教育委員会 1984 『塚田遺跡』  
 御代田町教育委員会 1985 『下荒田遺跡』  
 小諸市教育委員会 1981 『五ヶ城』小諸市埋蔵文化財発掘調査報告第 5 集  
 小諸市教育委員会 1984 『久保田』小諸市埋蔵文化財発掘調査報告第 8 集  
 小諸市教育委員会 1989 『和田原・鎌田原』小諸市埋蔵文化財発掘調査報告第 13 集  
 小諸市教育委員会 1994 『東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原』小諸市埋蔵文化財発掘調査報告第 17 集  
 小諸市教育委員会 1994 『大塚原（第 2 次）』小諸市埋蔵文化財発掘調査報告第 20 集  
 小諸市教育委員会 2002 『油久保』小諸市埋蔵文化財発掘調査報告第 31 集  
 浅科村教育委員会 2001 『海戸田 A 遺跡』  
 佐久市教育委員会 2001 『西一本柳遺跡Ⅴ・Ⅵ 中長塚遺跡Ⅰ・Ⅱ 松の木遺跡Ⅰ・Ⅱ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第 91 集  
 佐久市教育委員会 2010 『岩村田遺跡群西八日町遺跡Ⅳ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第 172 集  
 佐久市教育委員会 2014 『松の木遺跡Ⅲ』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第 223 集

#### 上田盆地

- 武石村 1989 『武石村誌』第 2 編 村の歴史  
 東部町 1990 『東部町誌』歴史編上  
 丸子町 1992 『丸子町誌』歴史編上  
 小県上田教育会 『上田・小県誌』第 6 巻歴史編上（一）考古

- 東部町教育委員会 1975 『城の前遺跡緊急発掘調査報告書』  
 東部町教育委員会 1988 『鍛冶屋遺跡緊急発掘調査報告書』  
 東部町教育委員会 1989 『高呂添遺跡 井高遺跡緊急発掘調査報告書』  
 東部町教育委員会 1990 『七ツ石遺跡 石原田遺跡 古賀礼遺跡緊急発掘調査報告書』  
 東部町教育委員会 1992 『東五町遺跡 西五町遺跡緊急発掘調査報告書』

- 上田市教育委員会 1975 『天神遺跡 山田屋敷遺跡緊急発掘調査報告書』
- 上田市教育委員会 1983 『和手遺跡緊急発掘調査報告書』上田市文化財調査報告書第20集
- 上田市教育委員会 1997 『琵琶塚遺跡Ⅱ緊急発掘調査報告書』上田市文化財調査報告書第33集
- 上田市教育委員会 1989 『林之郷遺跡緊急発掘調査報告書』上田市文化財調査報告書第35集
- 上田市教育委員会 1989 『大道下遺跡緊急発掘調査報告書』上田市文化財調査報告書第38集
- 上田市教育委員会 1991 『林之郷・八千原遺跡緊急発掘調査報告書』上田市文化財調査報告書第37集
- 上田市教育委員会 1994 『宮の前遺跡緊急発掘調査報告書』上田市文化財調査報告書第51集
- 上田市教育委員会 1996 『上田原遺跡 塚原古墳群 下之条条里水田遺跡発掘調査報告書』上田市文化財調査報告書第56集
- 上田市教育委員会 1997 『金井裏遺跡Ⅱ緊急発掘調査報告書』上田市文化財調査報告書第64集
- 上田市教育委員会 1998 『浦田A・宮脇遺跡緊急発掘調査報告書』上田市文化財調査報告書第66集
- 上田市教育委員会 1998 『宮原遺跡緊急発掘調査報告書』上田市文化財調査報告書第70集
- 上田市教育委員会 1999 『浦田B遺跡発掘調査報告書』上田市文化財調査報告書第75集
- 上田市教育委員会 2001 『海善寺裏遺跡 道祖神遺跡緊急発掘調査報告書』上田市文化財調査報告書第84集
- 上田市教育委員会 2000 『下町田遺跡Ⅱ発掘調査報告書』上田市文化財調査報告書第82集
- 上田市教育委員会 2002 『大日ノ木遺跡発掘調査報告書』上田市文化財調査報告書第89集
- 長野県埋蔵文化財センター 1998 『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書 2 - 上田市内・坂城町内 - 国分寺周辺遺跡群 上田城跡 風呂川古墳 弥勒堂遺跡 開畝遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センター 1999 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 21 - 上田市内・坂城町内 - 大日ノ木七ツ塚古墳群 染谷台条里 陣馬塚古墳 宮平 上原古墳群 山崎古墳群 山崎 山崎北 東平古墳群 土井ノ入窯跡 観音平経塚 小山製鉄』
- 丸子町教育委員会 1994 『湖ノ上遺跡Ⅱ』
- 長門町教育委員会 1984 『中道遺跡緊急発掘調査報告書』
- 長門町教育委員会 1987 『六反田遺跡Ⅱ緊急発掘調査報告書』

## 長野盆地

長野市 2000 『長野市誌』長野市誌編さん委員会

## 塩崎遺跡群

- 長野市教育委員会 1978 『塩崎遺跡群—塩崎小学校地点遺跡の第1次調査報告—』
- 長野市教育委員会 1979 『塩崎遺跡群—塩崎小学校地点遺跡の第2次調査報告—』
- 長野市教育委員会 1991 『四ツ屋遺跡(1)～(3) 徳間遺跡 塩崎遺跡群(3)』
- 長野市教育委員会 1986 『塩崎遺跡群(4)—市道松節—小田井神社地点遺跡—』
- 長野市教育委員会 1991 『塩崎遺跡群(5)—消防塩崎分署地点—』
- 長野市教育委員会 1991 『塩崎遺跡群(6) 石川条里遺跡(5)』
- 長野市教育委員会 1992 『塩崎遺跡群(7) 塩崎小学校・水泳プール改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 長野市教育委員会 1995 『塩崎遺跡群(8)—町屋敷地点— 石川条里遺跡—市道篠ノ井南64号線地点— 篠ノ井遺跡群』
- 長野市教育委員会 1980 『篠ノ井遺跡群—大規模自転車道地点遺跡の調査報告—』
- 長野市教育委員会 1989 『篠ノ井遺跡群(2)—市道山崎唐猫線地点—』
- 長野市教育委員会 1991 『篠ノ井遺跡群(3)—中部電力北信坂城線鉄塔地点——長野市営塩崎体育館地点—』
- 長野市教育委員会 1992 『篠ノ井遺跡群(4)—聖川堤防地点—』
- 長野市教育委員会 2002 『篠ノ井遺跡群(5)—主要地方道長野上田線 塩崎バイパス 長野県単独事業地点』
- 長野市教育委員会 2007 『篠ノ井遺跡群(6)—主要地方道長野上田線 塩崎バイパス 国庫補助事業地点』
- 長野県埋蔵文化財センター 1997 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 16 - 長野市内その4 - 篠ノ井遺跡群』
- 長野県埋蔵文化財センター 1998 『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書 4 - 長野市内その1 - 篠ノ井遺跡群ほか』



#### 横田遺跡群

長野市教育委員会 1987 『横田遺跡群富士宮遺跡』

#### 屋代遺跡群

考古資料刊行会 1971 『下条・灰塚』

更埴市教育委員会 1994 『長野県更埴市屋代遺跡群大境遺跡Ⅳ・Ⅴ』

更埴市教育委員会 1995 『長野県更埴市屋代遺跡群大境遺跡Ⅵ』

更埴市教育委員会 2000 『屋代遺跡群—国道 403 号（土口バイパス）道路改良に伴う発掘調査報告書』

更埴市教育委員会 1990 「2 外西川原遺跡他 発掘調査」『平成元年度更埴市埋蔵文化財調査報告書』栗佐遺跡群

更埴市教育委員会 1985 『長野県更埴市栗佐遺跡群五輪堂遺跡Ⅲ』

更埴市教育委員会 1985 『長野県更埴市栗佐遺跡群五輪堂遺跡Ⅳ』

更埴市教育委員会 1985 『長野県更埴市栗佐遺跡群五輪堂遺跡Ⅴ』

長野県 更埴市教育委員会 1969 『生仁』長野県考古学会研究報告書 7

更埴市教育委員会 1989 『生仁遺跡Ⅲ』

更埴市教育委員会 2001 『生仁遺跡Ⅳ』

更埴市教育委員会 1990 「2 外西川原遺跡他 発掘調査」『平成元年度更埴市埋蔵文化財調査報告書』

長野県埋蔵文化財センター 1998 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 25 - 更埴市内その 4— 更埴条里遺跡  
屋代遺跡群—弥生・古墳時代編』

長野県埋蔵文化財センター 1998 『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書 3 - 更埴市内— 更埴条里遺跡 屋代遺跡  
群』

長野県埋蔵文化財センター 2000 『国道 403 号土口バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書 屋代遺跡群』

